

目 次

| | |
|--------------|-------|
| 聖訓摘要 | 日生上人 |
| 日蓮宗概観(其四) | 故梶木顯正 |
| 破邪顯正(其二) | 磯部滿事 |
| 法華經講話(第三十一講) | 小林一郎 |
| 孟蘭盆のお話 | 道重信教 |
| 記事 | |

○本部團報地方致報 ○寄附金維持及團費誌料領收

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ當所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

日生上人

妙法尼御返事

日本國に渡れる處の佛經竝に菩薩の論と、人師の釋を習ひ見候はばや、又俱舍宗、成實宗、律宗、法相宗、三論宗、華嚴宗、真言宗、法華天台宗と申す宗どもあまた有りと聞く上に、禪宗、淨土宗と申す宗も候なり。此等の宗々枝葉をば細かに習はずとも、所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に、隨分に行りまはり、二十六年の年より三十二に至るまで二十餘年が間、鎌倉、京、叡山、圓城寺、高野、天王寺等の國國寺寺あらく習ひ回り候ひし程に、一の不思議あり、我等がはかなき心に推するに、佛法は唯一味なるべし、いづれもいづれも心に入れて習ひ願はば生死を離るべしとこそ思ひて候に、佛法の中に入りて惡しく習ひ候ひぬれば、謗法と申す大なる穴に墮ち入つて十惡五逆と申して日日夜夜に殺生、偷盜、邪淫、妄語等をおかす人よりも五逆罪と申して父母等を殺す惡人よりも、比丘、比丘尼となりて身には二百五十戒をかたく持ち、心には八萬法藏をうかべ

て候やうなる、智者聖人の一生が間に一悪をもつくらず、人には佛のやうに思はれ、我身も又さながらに惡道にはよも墮ちじと思ふ程に、十惡五逆の罪人よりも強く地獄に墮ちて、阿鼻大城を極として永く地獄をいてぬ事の候ひけるぞ。(繪圖遺文錄)

この御書は相當長い御消息であります、就中茲に抽出した所が最も大切な御教訓であると思ふのであります。日蓮聖人は十二、十六の年より三十二に至るまで二十餘年が間、鎌倉、京都、叡山、園城寺、高野山、天王寺等あらゆる所をお廻はりになつて佛敎の研究を爲さつた、枝葉の事は一々調べる暇もなかつたけれども、その大事な所は悉く之れを調べて見たのである。所がそこに一つの不思議な事があるのは、一と通りの考へでは、どういふ宗旨でも皆佛法であるからして、誠を盡してやりさへしたならば悪い事もなからうと思ふ譯である、日蓮も始めはさういふ風に考へて居つたけれども、段々次第に研究して行つて見ると、何にも悪い事をせないやうな人でも、佛法の中の謗法といふ罪に觸れるといふと一つの悪い事もせぬやうな人が却つて地獄に墮ちて行くといふことがある、これは一大事の問題だと思ふて段々研究を進めてその事を明かにしたのである。謗法といふ罪は自分も罪になるとは思はず、人も大した事とも思ふて居らぬけれども、それが佛敎に於ては一番恐るべき罪であるといふ事を仰せられて居る。大體謗法といふ事はどういふ事かといふと、方便の敎に依つて眞實の敎を謾り、或は疑ふ、所謂低い者から高い者を敵とするといふ場合が謗法の罪といふことになるのである、即ち本末輕重が判らな

くなれば、そこに罪を生じて來るのである。世間の言葉にも「小忠は大忠の賊」といふ言葉がある、忠義といつても小さな忠義をして居るが爲めに大きな忠義を忘れる、或は「己れを潔くせんと欲して大倫を紊る」、個人の人格としては立派であるけれども、仁義忠孝の大倫に外れるといふやうな譯であつて、女房を可愛がつて居るといふことが善いにしても、その爲めに親を忘れる、女房を貰つた爲めに親孝行が疎んせられて來たといふことになる、その女房を可愛がつて居るといふ事だから考へたら悪い事でもないけれども、親を忘れるといふ所に罪を生じて來るのである。阿彌陀様を信心して居るといふ事は悪い事ではないやうだけれども、本佛としての釋迦如來を忘れてしまつて、迹佛としての阿彌陀にのみ只管に走る所に罪といふものを生じて行くのである。その所を日本人が十分了解せぬ爲めに、佛敎の眞實、方便の關係が紊れて來たものである。これは佛敎に所謂「大義親を滅す」といふ言葉もやはりそれであつて、平生なれば親孝行が大事だけれども、一朝國家の大事に臨んだならば、時には親を捨てて君に就いて行かなければならぬといふやうな、大義親を滅すといふ事を知らなかつたならば、どうも本當の道德といふものは行ふことが出來ないぢやないか、さういふやうな大事な點を茲に御注意になつて居るのであります。

それ故に法華の信者は、物の本末輕重といふ事を常に心懸けて、善い事をするからと言つても重いと輕いといふ事に注意をして行かなければならない。能く日蓮聖人はその例として引いて居られる、同じ

手で物を叩いても、綿を叩いたならば手に疵は出来ないけれども、大きな巖を叩けば手に疵がつく、同じ者を殺したにしても、泥棒にでも入つて来た者を殺したのと、親切な親を殺したのでは、同じ刀で殺すのだけれども、相手に依つて罪の軽重といふものを生じて来るのである。忘れると言つても、家に飼つてある猫に飯をやるのを忘れるのも、親に御飯を差上げるのを忘れるのも、忘れるといふ事は同じやうだけれども、相手に依つて大變違つて来る。そこで佛教に於ては、一番大事な本佛釋迦如來を忘れるといふことになつては、他の小さい善い事を幾らしても駄目だといふ事になる。家に於て言へば商賣を勉強して居りますとか、今日は障子を貼りかへる爲めに晩の御飯を忘れて居りましたとかいふ事で親を忘れる、それはいかん。障子を貼りかへる事は善くとも、親に御飯を差上げることを忘れて、障子ばかり貼つて居つてはいかぬといふ事になる。日本の國に於てもやはりさうであつて、社會事業が如何に發達しても、皇室に對する忠節といふものと之れを取かへたら大變間違つて来る。今はそれが餘程危くなつて居る、社會の貧乏人を助けるといふ事が非常に善い事だと、世間の人は一と通り考へて居るけれども、さういふ事の爲めに今迄あつた忠義の心を嘲つて、軍人が國家の爲めに忠義を盡すナンといふのは古臭い、今日は貧乏人を救はなければならぬといふやうなことを言ひたがるが、貧乏人を救ふといふ事は善いけれども、それが爲めに忠義を輕んずるといふと非常な間違ひが出て来るのである。日蓮聖人が律國駁論を御主張になつたのはそれが爲めである、その點が今も昔も道德上非常に大事な問題になつて居るのであります。

此の日本國の一切衆生の爲めには、釋迦佛は主なり師なり親なり。(繪圖遺文註)

これはお釋迦様が日本の人々の精神的の親であり師匠であり主人であるといふ事を言はれたのであります。この事は法華經を信する者の覺悟としてははつきりして置かなければならぬ、肉體を以つての親は誰でも極つて居るのだけれども、この靈魂といふものは今度生れる時出来たのでもなければ、死ぬ時消えるものでもない、永い／＼流轉を辿り、これから先き永遠に行く間の靈魂に就いて、本當に心配して呉れる所の親は誰かといふと、即ちお釋迦様であるといふ事を知らなければならぬ。それは人間の親も無論有難いけれども、親も死んでしまひ、子も死んでしまつて、親も灰になつたか俺も灰になつたといふやうになつてしまへば、親子の關係はそれで切れてしまふ。どつちか生き残つて居るとしても「ア親父も灰になつたか」といふ譯で縁が切れてしまふ。さうしてその靈魂は親父は蛙になり、息子はゲヂム／＼になつたといふやうなことになる。終へば、その關係といふものはそれ切り忘れられてしまふのである。甚しきに至つては、この世の中に於て夫婦如何に交情が好くとも、果報に依つて亭主は蛇になつた、女房は蛙になつたといふことになれば、今まで交情の好かつた者でも、「これは美味しい餌が来た」と言つて、女房でも何でも構はないペロリと呑んでしまふ譯である、それは實に恐しい關係に依つて變化をして行くものである。お釋迦様はその事を始終仰しやつたが、併し熟く考へて見るとそんなもの

のである。であるから精神の方の親は、幾度生れかはり誤ちを取つても、何處までも之れを教はうとして、お互が今度教はれずして、又迷つて或は畜生に、或は餓鬼に墮込んで居つても、其處まで行つて、も教はうとして御心配下さる、本當の親切を持つ親は、お釋迦様であるといふ事をはつきり信じて置かなければならぬのである。それが決らなければ宗教といふものになつて来ない、信する信じないはその人の勝手だけれども、掌を合せて法華經が有難いと思ふて「南無久遠實成釋迦牟尼佛」と唱へた以上は、その位の事は知つて居らなければならぬ、何故に有難いのか判らぬでは駄目ぢやないか。そこが非常に大事な點で、どうも日本の今日の人達が佛教を信するのは、その永遠の精神の重いといふ事を忘れて居る、西洋の基督教は、兎にも角にも信仰の中心には、基督が教へた通り「誰が吾々の精神の親ぢや」といふ事を信仰の第一の力として居る、あとは附けたり議論である。それを忘れて居る者は一人も無い譯である、それを基督教の中から除つてしまつたならば、基督教の生命といふものは全然無くなつてしまふ。然るに佛教の方では、その信仰の生命となるべきものを除つてしまつて居るから、法華といつて見た所が何が法華だか判らぬ、信仰の中心といふものがない、唯だ南無妙法蓮華經といふやうな言葉だけ教へて居る、本當の心得といふものは空っぽである。唯だ言葉の南無妙法蓮華經だけで行くならばこれはどんな宗教にでもなる、交代神教といつて、今日は此方の神を信じ、明日は彼方の佛を信するといふやうな、代る／＼移つて行く低い宗教にもなる。或は萬有神教といつて、草でも木でも石でも何で

も神であるとして信じて行くやうなものにもなる。或は動物崇拜といつて、狐を拜んだり狸を拜んだりするやうなものにもなつて行くのである。言葉は立派であつて見た所が、頭が空っぽだから何にでもなる。意味を教へずして言葉だけ與へる、恰度「親孝行」といふ言葉だけは教へるけれども、その意味が判らない、親の頭を叩く事が親孝行だと教へられれば「親孝行々々」と言ひながら親の頭を叩くやうな事になる。南無妙法蓮華經と唱へながら佛様を忘れて居る、「自我得佛來」とお經を讀みながら本佛の事は判らぬ、「お釋迦様などはどうでも宜い、此方は自我得佛來で御座んす」と言つてやつて居る、えらい者が出来たものである。これはどうしても大改革をせぬ限りには、法華經の教は盛んにならない。今までのやうな無教育な判らぬ者を眼當てに日蓮主義をやることは、最早や今日は出来ない、過去の宗教として葬られてしまふものならばそれで宜いけれども、將來に益々發展をして、遂には全世界に法華經の光を顯はさうとするには、どうしても意味を正しうして法華經を宣傳しなければならぬ。



日蓮宗概観 (其四)

故 梶 木 顯 正

第三章 祖門の高弟と外護者

(一) 六上足

(1) 日昭上人 大和阿闍梨、又大成辨と云ふ(大聖人は玉と呼び)上人は大聖人に事へて内治の功實に大なり。承久三年下總能手の郷に生る(父は印東祐順)出家して天台宗叡山に學ぶ、後ち建長五年日蓮聖人の鎌倉布教途上に出會し弟子となる、上人は師の命に依り能く内治に務め玉ふ。(聖祖の四大難に一度も隨從せざるは、常に大聖人の難に遇ひ玉ふ毎に鎌倉濱戸(後ち法華寺を建つ)に身を隠し、退いて専ら付屬の法を護り弟子信徒をして教ぞざらしむるに務め、大聖人をして後顧の憂ひなからしめ

んが爲であつた)聖祖身延隱退後は(比企)妙本寺を監す、後又辭して濱戸に住す。池上宗仲、本門寺を開き、上人を招けども應ぜず、聖祖滅後身延に常不輕院(雨の坊)を構へ輪次守塔の住所とす。弘安六年正月「身延清規」を作る、同十月本門寺に會して聖祖の遺文百四十餘篇を輯む、(之を註内)後ち叡山の尊海及び其の弟子智祐を京都に化し、智祐に日祐の名を與へ「本門圓頓戒相承血脈譜」を作り與ふ。次で風間信昭の請に依り法王山妙法寺を開き、又濱戸は積功累徳の地なれば(八十二)弟子日成をして玉澤に妙法華寺を建てしめ、日祐を山主として終焉の地と

す。元享三年三月廿六日百三歳を以つて此處に寂す。聖祖の滅後六上足身延を輪番制に依つて守る、則ち正輪次(六上足之)副輪次(中老僧之)之れなり。聖祖滅後第一周忌に輯めた遺文集之を録内と云ふ(卷四十八)第三回忌に輯めた遺文を録外と云ふ(百五十九通)

(2) 日昭上人 大國阿闍梨又は筑後房と云ふ寛元元年(又は三年)下總能手に生る。父は平賀有國、母は日昭上人の令妹。建長六年歳十、父携へて聖祖に投ず最も聖祖の愛撫を蒙り、聖祖岩本に入藏するや左右に事して薪水の勞に従ふ(十八歳得度す至)師匠伊豆流罪の時之に隨はんとして官許とす、由井ヶ濱に右腕を折らる。後ち専ら昭師の訓陶を受く。聖祖文永八年九月佐渡流罪の節は三位日進(當時十)と共に光則の牢屋に囚はる。居る事四年、其間密かに許を得て四度佐渡に恩師を訪ふ、橋の實を負つて行くが如き殊に有名なり。聖祖入滅後、恩師の命に依り比企池

上兩山を監す、(之の風水は後世に傳ふ、則ち祖門の三長三本寺之を云ふ)上人身延に正法院を建て輪次守塔の住所とす。

池上比企兩山の主たる事十餘年、正應四年九月大曼荼羅を圖して弟子日輪に授け、兩山を監せしむ。元應二年池上本門寺内南谷(今の照慶院)にて正月廿一日七十八歳寂す。(後廿八年後光嚴帝)遺命に依り得度の地松葉ヶ谷に茶毘す。建治三年曾谷教信一寺を建て、上人を請ふ、上人兩山を監する故に弟子日傳をして監せしむ、此の寺を聖祖名けて本土寺と云ふ。會下に日輪・日像・日善・日傳・日範・日印・日澄・日行・朗慶等あり。日蓮聖人の教を天下に布く實に其の大半は上人の力に依る。

(3) 日興上人 白蓮阿闍梨、伯耆房と稱す。寛元四年甲州皷澤に生る、幼にして岩本實相寺に投ず。建長五年得度し十一歳にして三井に學ぶ、居る事三年母の喪に依つて故郷に歸る、時に聖祖實相寺に入藏中

なれば、寺の學頭智海深く聖祖の學徳を慕ひ「摩訶止觀」の講義を請ふ。興師又其の席に達なり大いに感して聖祖鎌倉に歸る時、吉祥庵（師の幼名）と共に松葉ヶ谷に來り弟子となる。文應元年日朗と共に得度し名を日興と改む。大聖人松葉ヶ谷遺難後、下總の富木氏に寄るや日朗と共に至り事ふ。亦聖祖佐渡に流罪の時は日向・日頂・日持の諸上人と共に交々佐渡に師を訪ひ事ふ。興師多く聖祖の原稿を書されたりと。（御講文書、御後口傳等は）

聖祖身延入山後は其の左右に事へて怠らず、時に駿州富士郡の上野氏、もと岩本の檀越なり、學頭智海、聖祖を崇敬するを見て大いに信仰を起し、時々興師を招じて法義を説かしむ。

身延の上人の輪次守塔の住所は常在院なり、弘安八年日向身延を輪番するや、波木井實長云く「聖祖の輪次遺命之を守る事最も重しと雖も、一山の主なくば、殆んど旅泊の如し、身延の繁榮期すべからず、

以て怒つて終に破門す。
日尊之が爲に大いに發憤し僅か十二年の間に冊餘ヶ寺の法幢を建つ、興師之を喜んで破門を許すと云ふ。又興師開草の寺甚だ多し。（後世上人を興門派の派祖と爲すに至る）

(4) 日向上人 民部阿闍梨、佐渡房と號す、建長五年二月房州男金村に生る、父は（姓は小林氏聖祖の父と同じと云ふ）民部實信と云ふ。上人幼名實長と稱す、十歳の時叡山天台の僧來り宿し、實信に請ふて叡山に伴ひ剃髮して民部郷と云ふ、後ち父母聖祖に謁し終に歸依して實長を叡山より召還し聖祖に事せしむ。文永二年得度し日向と名乗る。高祖佐渡に滿せらるるや上人數々佐渡に航して事ふ、常に聖祖に代つて清澄に登り道善を訪ひ玉ふ。（道善坊の遷化は建治二年三年五十五歳）聖祖建治二年七月、日向・日實の一人なり（今の時なり）聖祖建治二年七月、日向・日實の一人なり）等を使として清澄道善坊の墓前に報恩抄二卷を著して捧げ讀しむ。弘安八年上人身延の輪番となるや、

終には高祖棲神の靈場も他日荒涼する如きあらば何を以て聖祖に見えん」と向師聞いて之を昭・朗に告ぐ、二師また波木井の言を然りと爲す、然るに日興上人獨り斷然起つて聞かず、云く「輪次の人無きに至つて議せんは可なり、然るに今我等六人親しく輪次の遺命を守る、未だ滅後三年ならずして之に背かんとす甚だ非なり」と、實長怒つて終に交を絶つ、上人も又憤激して正應元年の冬富士郡上野に去る。而も上人感ずる處あり房州保田に小庵を舁し門を閉ちて唱題讀誦最も本化律を勤修す、今の中谷山妙本寺は其の跡なり。永仁五年波木井實長没するに及び富士上野の南條七郎次郎寺を造つて上人を迎ふ、上人三度辭するも容さず終に意に隨つて監す富士の大石寺之なり。（富士五門、一は上野の大石寺二は同寺五は小泉）後ち又北山に本門寺を開いて居る。正慶元年二月七日八十八歳にして寂す。上人性最も俊嚴、孫弟子日尊の如き或日御講談中外見したる故を

(上人身延輪番守塔) 波木井實長輪番制を廢せんとす、諸兄波木井に背く能はず（興師の事は）興師獨り聽かず昭師は大利に住するを好まず、朗師は兩山を監する故を以て辭す、依て波木井實長日向上人を藻原妙光寺より請ふて身延の第二主と爲す。（第一主は）向師居る事廿六年日進を第三主として後ち下總坂本村法華谷に退き、正和三年九月三日六十三歳を以て入寂す之より前き上總の藻原兼綱、富木胤繼に依つて大聖人に歸依し、後ち邑に妙光寺を建て、向師を請ひ開山と爲す。（又向師の筆受録に「日向記」あり）

(5) 日頂上人 伊豫阿闍梨、本國院と號す、建長四年駿州重須の郷に生る、姓は橘氏父は定時と云ふ、父駿州に戰死す依つて母に隨つて鎌倉に來り、次で母富木胤繼の後妻となるや師も又伴はれて富木氏に養はる。下總富木氏の香華院に天台宗の談林あり、（今の真間）文應元年聖祖松葉ヶ谷の難を避けて胤繼に寄る時、真間山の住僧聖祖と法戰を交へ終に負

けて山を逃ぐ、依て胤繼文永四年上人を聖祖の弟子と爲し、且つ眞間山を之に供す、故に聖祖名を日頂と賜ふて之を監せしむ。年十六歳、後ち鎌倉に至り聖祖に事ふること十一年間と云ふ。大聖人の滅後身延に輪次守塔の居を辨す本國院(今の山)なり。乾元元年法を弟子日揚に付し、諸國を遊化して駿州重須に至り(重須は實父定時)去るに偲びずして居る事十六年、嘉暦三年八月十日七十七歳にして寂す(墓は富士に在)。頂師は聖祖上足中戒行第一の稱あり、上人聖祖の第三回忌法要に際し、他宗徒との法戦の爲め運參せし(運參は實父定時)の故を以つて父胤繼の怒りを蒙り「如何なる事情にもよれ師匠の三回忌に運參するが如き不孝者は以後子とは思はず」とて勘當を申し渡されたり。上人訖び玉へ共胤繼許さす三日三夜杏樹の下に泣いて經行し、終ひに去り玉ふと、中山の泣き杏は之より起ると云ふ。然れども佛弟子として法戦の爲めに師匠の法事に運參し、親の死に目に會へなかつた

からと云つてそれが果して不孝であると言へやうか？ 使命に忠實であればある丈それだけ今のやうな事は有りがちな事である、果して亦この道理を富木氏は解せざる人であつたであらうか、六老僧中戒行第一と稱された日頂上人が此處の道理に暗かつたとは斷じて信ぜられない、して見ると中山の泣杏の傳説は意味を爲さぬのみならず、寧ろ二人の先徳を傷つける愚説と言はねばならぬ。

(6) 日持上人 蓮華阿闍梨、又甲斐公と云ふ、建長二年駿州松野の郷に生る。姓は松野氏、六郎左衛門左金吾の子なり、少にして叡山に登り得度す。天台の教觀を修め後ち岩本實相寺の智海に學ぶ、次で始めて聖祖の名を聞き日興を縁として祖門に歸す、時に廿一歳にして文永七年なり。名を日持と改む、向・朝・頂師と共に能く聖祖に師事す、身延に本應院、(雀の坊)を結んで輪次守塔の居とす、上人又文學に長じ「持法華問答抄」を著す、聖祖之を容れて己が著

作中に加へ玉ふとか。弘安六年松野の城主寺を建て上人を招待す、即ち貞松山蓮永寺之なり。

(1) 日合上人 筑前阿闍梨と云ふ、下總工藤左近丞吉隆の遺子にして野呂妙興寺の開山なり。永仁元年十月十一日遷化。

(二) 中老傳

上人曰く「本國の弘教既に其の人に乏しからず、我れ願はば法を異域に布き妙法を海外に開揚せん縱令業成らずして魚腹を肥さん亦願のみ」と。永仁三年九月、高祖の十三回忌を修し身延の祖廟に詣で、翌四年正月元日、法を弟子日教に付し、單身飄然として傳道の旅に上る。奥州弘前より船に乗じ(北海道 樺太を経て同宮)亞細亞大陸に渡り終る處を知らず、(今日の調査に依れば滿蒙に)時に歳四十六、上人を以つて本邦海外布教の嚆矢と爲す、故に出發の日を上人の寂日とす。今日の調査に據れば滿洲支那蒙古等に法華經の足跡を發見するは、悉く上人傳道の舊趾なりと云ふ。實にその意圖の遠大なる決心の壯烈なる、到底今日吾人の持つ文化を以つてしても猶充分に爲し能はざる處を爲し玉ふた、其の雄圖の如何に高邁幽遠なる實に驚くの外はない。

(2) 日辨上人 越後阿闍梨と云ふ、駿河の強信熱原甚四郎の子にして富士瀧泉寺の學頭なり。後ち聖祖に歸し建治弘安の頃下野公日秀と共に日興上人の弟子となり、富士郡に折伏遊化を爲す、爲に熱原法難、(又は加島法)を起せり、弘安四年加島に蓮壽寺を開く(難とも云ふ)。聖祖滅後遊化盛にして上總鷲巢鷲山寺、峰妙興寺、甲州遠照寺、相州弘經寺、神崎常教寺、京本門寺等の開山なり。應・長元年六月廿六日七十三歳を以て寂す、主義として本勝・述・劣を主張す。

(3) 日高上人 伊賀阿闍梨又は帥阿闍梨と名く、太田乘明の子、(身延の聖祖に千日の開給)下總金原妙大寺、調子妙福寺、常州加倉井妙徳寺等の開祖たり、中山法華經寺の第三主となる。(中山は高師に到つて寺)正和

三年四月廿六日五十八歳を以て遷化。

(4) 日貢上人 但馬阿闍梨と云ふ、伊豆の人にして庄司伊東朝高の姻族なり。沼津の聖祖の化跡に辨庵を建て、居す、之れ今の妙海寺なり。正和三年十月廿三日遷化。

(5) 日家上人 寂日坊阿闍梨と云ふ。上總佐久間重吉が子なり、文永元年聖祖房總に布教し玉ひ、會々佐久間邸に一七日の間講演し玉ふ時弟子となる(當時年)後ち小湊誕生寺を開き、聖祖の御父母及御幼年の像を祭り、聖跡を明かにして後代に宣揚の端を開く。(蓮華洞、誕生水) 家師は日法上人と共に出生地に寺を建て、聖祖を初祖とす。正和四年七月十日五十八歳寂。

(6) 日位上人 治部阿闍梨(淡路公)の出生地不明、駿州池田青龍山本覺寺の開山なり、庵原郡等覺寺を開く文保二年四月廿三日遷化す。

(7) 日秀上人 下野阿闍梨と云ふ。駿州西山の高橋入

道の子なり、岩本實相寺の學徒にして瀧泉寺の學頭たり、日興・日辨と共に適化折伏を盛にす、依つて熱原法難を起せり、上人は元弘の事に關し大いに勤めて皇室に功あり、後醍醐天皇より常在院の號を賜ふ。建武元年一月十日寂。

(8) 天目上人 美濃阿闍梨と號す。伊豆波多郷の人、建治年中聖祖に事ふ。父は鎌倉三浦氏は熱原甚四郎の女なり、聖祖滅後化を東西に布き、下總妙願寺・妙音寺・流山本行寺・品川妙國寺・鎌倉圓成寺等多くの寺を建つ。主義として本迹勝劣迹門不讀を主張す。延元二年四月廿六日寂。

(9) 日賢上人 淡路阿闍梨と云ふ、駿州安東の人もと實相寺の學徒なり、村松海長寺・雜司ヶ谷法明寺に居す。曆應元年三月十七日遷化す。

(10) 日法上人 和泉阿闍梨と云ふ、信州芝田右近の子なり、文永年中聖祖に歸伏す。甲州立正寺・駿州岡の宮光長寺は因を聖祖の化に發すと雖も、次で日

法上人が遷化に依つて天台密宗より改宗せしものなりと。曆應四年一月五日寂す。因に上人は彫刻を以て有名なり、刀を執れば必ず聖祖を刻す、聖祖可なりとして自ら點眼し玉ふ。數基あり特に一木三體尤もその美術的價值と共に有名なり。

(11) 日門上人 一乘阿闍梨といふ。(姓不詳常陸) 妙光寺・仙台光勝寺の開山なり。嘉曆三年十二月廿日寂す。

(12) 日忍上人 下野阿闍梨、駿河の人、(熱原甚四郎の子なりと) 相州愛敬長福寺・妙經寺・千代の蓮華寺・風早妙覺寺・鳥妙興寺等を開く。應長元年四月十日遷化し玉ふ。

(13) 日源上人 播摩法印といふ。字智海、岩本實相寺の學頭にして化主職たり、聖祖正嘉入藏に際し親しく止觀を聞き、心伏して終に建治の頃本化の徒となる。後ち日興上人等實相寺嚴譽を官に彈劾す、爲に官實相寺を日源に賜ふ。故に寺を本宗に改む、正和

四年九月十三日寂、雜司ヶ谷法明寺・碑文谷法華寺・駿州東光寺・傳法の正法寺等を開く。冷泉中將隆茂深く上人に歸依すと云ふ。

(14) 日進上人 大進阿闍梨、三位公と云ふ。下總曾谷教信の子なり、少にして聖祖に投じ談論風發能く人を化す。十三歳にして四條金吾頼基と共に龍象坊を論破す。聖祖佐渡に流され玉ふや日朝上人と共に土牢に投ぜらる。建武元年十二月八日七十六寂。上人は身延の日向の後を承けて第三世となる。

(15) 日傳上人 肥前阿闍梨、字は善智、肥前の人なり元真言宗甲州小室山の住たり、文永十一年聖祖の遊化に際し法論に破れ、聖祖を毒害せんとし、事露れ捨邪歸正して小室を本化の道場とし、弟子となる今の妙法寺是なり、又土祿懸腰寺を開く。乾元元年二月十二日寂す。

(16) 日保上人 美作阿闍梨、又は師法眼と云ふ。上總佐久間重貞の子にして日家上人の甥に當れり、文永

年中聖祖の弟子となる。後ち父の舊邸を寺とす興津妙覺寺は是れなり、聖祖七日の説法の舊跡にして誕生寺と通じて兩山一寺とし、日家上人と共に互に主となる。曆應三年四月十二日遷化、八十三歳。

(17) 日滿上人 豊後阿闍梨、佐渡遠藤爲盛(阿佛)の子にして藤九郎盛綱と云ふ。弘安二年父の遺骨を身延に奉じて出家し、佐渡の舊邸を改めて寺とす妙宣寺是れなり。八十九歳寂。

(18) 日曠上人 鏡忍房と云ふ、聖祖の直弟子なり(姓不詳) 文永元年十一月十一日房州小松原の法難に殞る。眞に捨身護法の龜鑑たり。(工藤吉隆の子判部阿闍梨日隆其造以つて第一) (日合上人と吉隆の子なりと云へば吉) 以上十八人を中老僧と稱すれども、又古説には六老十二中老を合して十八老僧とし、輪番帳所載を主張するあり。

破邪顯正 (其二)

佛の道

「佛と成るの念なければ人と成ることも亦難し」とは、深草元政上人のお言葉であり、日蓮聖人は「日蓮は少きより今生の祈りなし、只佛に成らんと思ふ計りなり」と仰せになつてゐる。世間で成佛といへば死人を指すやうに一般の頭腦は無理解であるが、佛に成るといふことは、佛陀のやうな究極の睿智を信に依て授かり、佛陀のやうな無量の慈悲を以て、佛陀のやうな自由の活動が出来るのが謂ふ處の成佛である。即ち主師親三徳を具備された最高の人格者をいふのであつて、土左衛門やブランコ往生では勿

豫告

本部に於て左記の通り相營み團員先亡後滅過去帳記入諸精靈祭を相營み可申候間御誘合せ御參詣被下度候

孟蘭盆會供養

七月十二日(日)午後二時ヨリ

法要卜講演

財團統一團

磯部満事

論ないのである。畢竟私共の理想は須らく遠大でありたい。

前號には人の道教を少々批判したのでしたが、現在ばかりを論じて、將來も過去も棚にあげて、そんな過ぎ去つた事や、未だ見へぬことに惱む者は馬鹿だといふやうに、この現在の變化にばかり執はれて居るのが、一般の傾向であるが、そんな淺薄な思想は實に危険であるといはねばならぬ。日蓮聖人は高著開目抄に於て儒教道教の聖賢を指して「此等の賢聖の人人は聖人なりと雖も過去をしらざるこそ凡夫の背をみず、未來を鑑みざること盲人の前をみざるが如し」と仰せられた。この複雑極まりない人生が、

さう簡單に片付け得らるるものではない、釋尊は阿舍の初に於ても、

如來は自ら世間を覺り、亦他の爲に説く、如來は世間を知り、如來は自ら世間の習を覺り、亦他の爲に説く、如來は自ら世間の道跡を覺り、亦他の爲に説く、世尊、此の頌を説いて曰はく、

一切世間

出一切世間を知り

一切世間

一切世の如實を説く

彼れは最上の尊雄なり

能く一切の縛を解き

一切の業を盡すを得て

生死悉く解脱せり。

とあつて、釋尊はよく人生の眞實の相を知り盡され又世間の風習をば悉知され、世間の道德的な事跡を知つて、人々の爲めに三世一貫した明教を敷かれたのであつた。

「我は度世の要道を説く」とて、過去と現在並に未來を一貫するといへ、その中心はこの私共の住む世界であり、現在生活が基であることは、佛教の

私共俗人は但仰いで信じて居ればよい、兎に角佛様の教を信じて惡道に墮つるなどといふことは考へられないといふ人が世間には澤山にある。果してさうなれば、七百年の昔、日蓮聖人の御出現も無意義のことである。釋尊は量りない法門をお説きになつたので、誰れかの歌のやうに「釋迦といふいたづら者が世に出で、多くの人を迷はしにけり」といふやうなことになる。然るに佛教は決してそんな散漫な分裂的な教ではなくして、出でては無量の法門とはなつても、それは必ず入つて一つに統一さるべきであります。佛にしても無數にありますが、それは皆釋尊、久遠の本佛に統一さるべきものなのであります。

近頃の教育を受けた多くの青年は、佛神の常住を信せず、自己の靈魂の不滅を認めない者があつて、吾等の精神はこの肉體と不離なものだから、この肉體が減び去れば當然精神も消滅するものであると考

正系と稱へられてゐる阿舍法華に於て極めて明瞭である。併し排佛の因襲に執られた一部分の輩は、既成佛教といつて捨てて顧みることもしない、寔に十和の璞のやうなものである。而して聖經に因らぬ自由宗教が有難いと思つて居るけれども、其の開祖の人格を調べた時に直ちに優劣が示されるであらう。夫等に走る人を見る時に、其人達は世の中に勞れた人、失敗した人々であつて、冷靜な批判力を失つた場合に夢中で飛び付いて來る、餓えた魚が釣針を呑むやうなもので、ハツと氣付いた時は既に遅い恨みがある。

お互は幸にも人間として生れた、そしてこの日本に生れた、そして幾分でもこの佛教に結縁したことは實に果報者といふべきである、同じ佛教といつても、釋尊の御精神を逸した大衆の心境を基としたものであつてはならない。よく聞かされることであるが、そんな六かしいことは専門に屬することでは

へて居る。而して私共の生れることは父母の和合に依るものであるといふ。それは親なくしては生れない其の通りであらう。日蓮聖人も赤白二滯其の中に識神を宿すと申された。これを今一步進んで考へてはしい、父母丈の力では子供は産れない、ここに今一つのが加はらねばならぬ、幸にして父母の力丈で子供が自由に出來れば、敢て子供の無い夫婦の悲嘆は起らないのである。けれ共いかに夫婦が睦まじくて、健康で肉體上には何等の欠陥ない家庭に於てさへ、求めても求められない子實のない淋しい事實が、世間には澤山ある、それは生理的の欠陥と片付けることはあまりに獨斷であるまいか。譬へば鐵と石と激しく打突かる時には火花を發するであらう、この火花は鐵と石丈では起らない、そこには第三者の可燃性の空氣中の酸素が働かからである如く、胎兒にしても肉體は魚鳥を混丸して赤白二滯、その中に識神をやとすといふこの識神なるもの

を考へたい。

凡そこの大自然の中にあるものは不増不減である。その形體の變化はあつても、有るものが消滅し去るといふことはない、随つて又無いものから新たに創造されるといふこともないので、神が萬物を造つたといふやうなお伽喃式は、學問上許されないことなのである。因果の理法は科學の進歩と共に益々確認されねばならぬ、本因本果の法門は佛徒の仰いで讃歎措かざるものである。それだから、私共の一身上に於ても、肉體の變化に依つて精神上にも變化は起るが、それは滅亡し終つたものではない。譬へば巻烟草に點火すれば、今迄の形態は灰と瓦斯體となる變化はあつても、何物もないといふことにはならない、その肉眼に見られないものを如何に認めるかといふ處に教の必要があり、そして信することに依つて解る、理解されるから行となり、そこに證といふものがある。

聖賢は私共のいふ幾多の體驗を既に過去に於て覺知された方であり、凡愚はその事實に出遇つて始めて氣が付くものと思ふ。そこでさういふ貴い教に信伏隨順して、疑を挿まない處に信心といふものが顯れるので、最初にこの信の一念發起せねば、いかに百萬語を羅列しても何等の價值はない。自ら己心を觀るといつても、自分の迷へる心で正しい自分を觀ることは出來得ない、覺られた釋尊の明教を鏡として自分の心を映す時に、ハッキリと觀ることが出來るのである。「心の師となるとも心を師とせざれ」とは金文である。この點深思すべきだと思ふ。泥棒にも三分の理ありといつて理窟をお互に戦はしても、結局は愚人理に詰まずである。只仰いで信じ伏して惟ふべきである。そこに感應の道交はるといふことになつて自然に本心の躍動を見るのである。

社會を觀るにしても、國家を論ずるにしても、これ等を組織して居る人間を正視せねばならぬ。人間

を觀ると一口にいつても、そこには千差萬別であるが、其の本質は平等無差別である、然るに世間では單に差別の相ばかりに捉はれて怨嫉排擠を事とし聞評呪咀に日を暮して居るものと、高き者も引き下して平等扱にし階級撤廢、貴賤無差別を歡ぶ人達は共に理想文化の退歩である。佛敎はこの二者を統一し、進んで其の眞實の相を覺知窮行せしめらるゝものなのである。佛道は實に人間の正しく活くべき道を教へられたものである。されば萬人の仰ぐべき教であり、歩むべき道であるが、特に世の指導の地位にある有識者には一日も忽儲に附すことの出來ない明教であり直道である、外國の教だとか、野蠻時代の遺物だなどと子供らしい考を捨てて、一番眞剣に研鑽する時に、從來の無智文盲を慚愧するに到ると同時に、各自の生活上に一大光明と無限の力と熱が體得さるるであらう。

教育は普及して物質文明は日に進歩しつつある

が、私共の心の問題は極めて等閑にされる傾向がありはしないか、尤もこれは肉眼で認められないから甚だ捕捉し難い、檢微鏡に照らされないから自然面倒なもの、解らない不思議なものとして先づ手近かな世間相にのみ重きを置いて、肉體には營養食を與へつゝ精神には何等糧を供給しないから、片輪の人間ばかりが出來るといふことになる、従つて制度に改善を施し綱紀の肅正を叫んでも、根本の心が覺醒せねば本筋には立ち歸らないであらう。徒らに宗教の聲ばかりを高くと、國民教育には宜しく宗教の力を以てせねばと識者は努めて居られる、至極結構な事と御同慶に堪えないが、そこに宗教の假面を被つたものと、眞正の宗教と、選擇を認めぬやうにせないと却て害毒の恐るべきものがある。三千年の昔釋尊は當時の世相が恰度今日の如き一面には物質萬能であり、一面には宗教の弊害を照覽遊ばして、そこに無上の大法門を展開されたのであつたことを想

ふて、現代何でも信仰はよい、宗教の信仰にわるいもののある道理はあるまい等と考へることを大に警戒すべきである。宗教に依つて國家は興り、宗教に依つて國家は滅ぶ。「彼の國に好かりし法なれば必ず此國にも好かるべしとは思ふべからず」とは、日蓮聖人の嚴訓である。私共の大に誠心を要する次第で、釋尊の教法は個人の救ひと同時に、又國家の成佛を説かれて居る。偉なる哉佛の道！

(次續)



法華經講話

(第三十一講)

小林一郎

妙法蓮華經譬喻品第三 (其三)

これから舍利弗の授記といふことになるのであります。授記といふのは、將來は佛の境界に到達するといふことを許されることでありますが、今まで法華經を主として立つて居る宗旨、例へば天台宗とか日蓮宗とかいふ宗旨の人々はいつでも言ふことです。「他の經を信心してもなか／＼佛には成れない法華經は成佛の直道、佛に成る一番近い道であるから、法華經を信じさへすれば誰でも佛に成れるのだ」といふことを申して、法華經の信仰を勧めて参つたのであります。この事は洵に結構なことであります。

警視廳各學校御用

新案 詰襟用クオンカラー

特 價 金 拾 錢

送 料 貳 錢

本品の特長

- 其一、夏は汗を吸ひ取りとても衛生的
- 其二、體裁スマート且つ永久型崩れず
- 其三、御家庭に於て簡単に洗濯出来る

東京市四谷區内藤町一

製造發賣元 山田商會

電話四谷七七七五番
振替口座東京六二二番

◇三越、三省堂、其他一流洋品店にあり

併しながら「成佛の直道」といふ意味は、他の道を通らないで、此の道で行けるといふ意味であつて、決して早道といふ意味ではないのです。そこを間違へて早道のやうに思つて、「他の經を讀んでは到底佛に成れないけれども、法華經を宜い加減に讀んで居れば佛に成れるのだ」といふやうに取ることは、非常な間違ひであります。それは是から經文を讀んで行けばよく判ることではありますが、成佛を許される場合に、決して今直ぐに佛に成るとも仰しやらないし、又今の心の持ち方の儘で佛に成るとも言はれないのであつて、マアそこが手掛りだから、その手掛りを失はないやうにして、將來善い行ひを積ん

で行けば必ず佛の境界に行けるのだと仰せられる。その條件が詳しく説かれてあるのに注意しなければなりません。

凡夫が佛の境界に到達することが、そんなに容易く出来る譯のものではない。併しながら今私共が方角を間違へて居るならば、何處まで行つても行先不到着が出来ないのでありますから、兎に角方角を間違はないといふことは有難い事です。私共が法華經を讀んで見て、現在有難いと思ふのは實に此の事です。この道は兎に角間違はない道だから、今の自分の力は足らぬけれども、この道を怠けないで、眼目も振らないで行つたら、結局は佛様の境界に行けるだらうといふ、そこに大なる喜びを感じるが、前途はまた實に遠遠なのです。此の事はお互ひが餘程シツカリ考へなければならぬと思ひます。

一體何事でも、善いものが早く出来ると云ふ筈はないのでありますから、根本からさういふ事を考へ

てはならない。物の種を播いて見ても、早く芽の出るものは早く腐る。草花の種を播いて見れば、十日か十五日で芽が出るが、早く芽の出たものは直ぐに花が咲いて、秋になればみな腐つてしまふ。種や、種々のやうな何百年も榮えるものは、種を播いても半年も経たなければ芽が出ない。「早く出来て何時までも残るやうに」……そんなうまい事は世の中にあり得るものではない。そこをツヒ考へずに、あまり骨の折れない早手廻しを考へるのが人情でありますけれども、早手廻しをやつては本當の事は出来ないのです。此の事はお互ひがよく平生に於て考へて置かなければならぬと思ひます。

明治節が近いある日、若い人々と共に集つて明治天皇の御生前の事を語りあつたのでありましたが、明治天皇の御一代に於て、東洋の小さい島國でありました日本が世界の強國に加はつたといふことは、實に貴い事であります。この偉大なる事蹟を御遺し

になつた 明治天皇の御製を拜して見ますと、その御製の殆んど大部分は「これからなか／＼大變だぞ容易なことでは行けないぞ」といふ意味の御製であるやうであります。これは殆んど他には類のないことでありませう。明治天皇崩御の際に、世界の有らゆる國の人々が御悼み申して、有らゆる國の主なる新聞や雜誌には、皆奉悼の意味の記事を掲げたのであります。それを幾つか集めて讀んで見ますと、いろ／＼人々の眼の著け所が異ひますから、甲の人は或る點をお讃め申し、又乙の人は或る點をお讃め申すといふやうに異ひますけれども、その總ての國の人の申したことに共通の點が一つある「それは何かと申しますと、昔から世界の英雄、豪傑と言はれた人は、大概自分の志を達して世界に知られるやうになる心で、放逸な、我儘な生活をするやうになり勝ちであるけれども、獨り日本の明治天皇はだん／＼御質素におなりになつた。日本の國の名

が世界に輝き渡ると共に、天皇の御生活はいよ／＼御質素になり、いよ／＼地味におなりになつた。これは殆んど歴史あつて以來世界の英雄、豪傑に例を見ない所だといふことを、例の英吉利の「ロンドン・タイムス」を始めとして、有らゆる方面で申して居つたやうであります。

この點はお互ひ日本人としては實に尊い事だと思ふ。明治天皇の御一生を、吾々共は微賤の者ですが、よく存じませぬけれども、よそながら拜して見ますと、天皇は晩年になつていよ／＼御質素になり、いよ／＼己を慎しむといふ御心持で居らせられたやうであります。斯くあつてこそ本當に日本の國の永遠の土臺をお固めになることが出来たのであらうと思はれるのであります。なか／＼物は急に出来ることではない。モウ少しで大丈夫といふ所で間違の起り易いものでありますので、良くなるに従つてますます慎しむといふ心得は、吾々には最も大事なこと

であると思ひます。日露戦争が済んで、日本の名が世界に響き渡つた頃の御製と覺えて居りますが、

とる棹のこゝろ長くもござよせむ

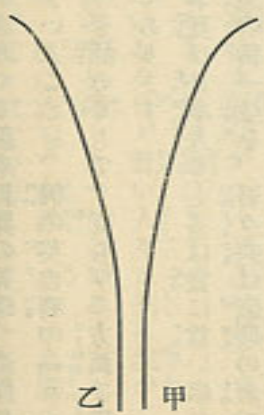
蘆間の小舟さはりありとも

と云ふ御製があります。國が今だん／＼順調になつて来て、今まで小さい國が世界に認められたといふ得意の時に、これから障りが多いのだ、蘆の間をわけて舟を岸に寄せるやうなもので、これから後に障りが多いのだから、心ながく先々の事を考へて行かなければならぬといふことを、御製にお詠み下さつたといふことは、實に有難いことである。實際さうです。物事が少し順調に行くと氣が弛み勝ちであります。その時は己を慎しむといふ心持を作ることが、本當の發展を促す根本の力でなければならぬと思ひます。

今私共が佛敎の修行を致して居るのでもその通りでありまして、幸に佛の教に値ふことが出来て、

少し右の方に外れて居り、乙の道は少し左の方に外れて居るとすれば、此の道を進んで行つた結果は、初め並んで居つた人がまるで脊中合せになつて行かなければならない。それと同じことで、吾々の信仰でもチョット外れたのを直さずに行つたならば、結局何處までも外れて、何處へ行つてしまふか判らない。私共は佛様を目標にして眞直に進んで行くつもりだけれども、その道が少し曲つて居るのを直さないで自然の儘に委せたならば、結局佛様と脊中合せになつてしまふかも知れない。この事は餘程氣を付けなければならぬことでもあります。現にさう言つては言ひ過ぎるかも知れないけれども、日蓮宗とか法華宗とかいふ名前をつけて、毎日法華經を讀誦して居る人が、佛に脊中合せになるやうな事をやつて居はしないか、だから何時でも己を振返ることを忘れてはならない。初めは一步の違ひが結局は千里の違ひにもなるのでありますから、そこはシツカリと

佛の道を學んで居る中に於ても、又何の幸であつたか、眞實の教を説かれた法華經を學ぶことが出来たといふことは、實に有難い事でありましたが、併しなからこの尊い教を學んで居りまする私共の心の用ひ方がチョット外れて行きますならば、行末どつちにどれ程外れて行くか判らないと云ふことを考へなければならぬ。そこで常に己を振返つて、見當を違へないやうにして行くといふことが最も大事だらうと思ふ。



例へて申せば、道が斯う二つある。この二つの道は初めは並んで居る道である。併しながら甲の道は

考へなければならぬと思ひます。と言つて始終ビクビクして居ても仕様がなかりありませうけれども、常に振返ると云ふことを忘れてはならない。

今この場合にお經の本文を讀んで見ますと、舍利佛が佛に成るといふことを許される場合に於て、釋尊は決してその儘お許しにはならないので、汝の今の心持を本にしてこれ／＼の修行を積んで行け、その修行が間違ひなく出来るならば、結局佛の境界にまで行けるぞといふことをお許しになつて居るのであります。此の所は餘程注意して讀むべきだらうと思ひます。

爾の時に佛 舍利佛に告げたまはく
吾今天、人、沙門、婆羅門等の大衆の中に於て説く

(爾時佛告舍利弗一 吾今於天人沙門 婆羅門等 大衆中説)

是はマア佛様が言葉を改められた譯で、今ここに大勢の人間の中で自分は本當の事を話すと云はれる「沙門」といふのは佛弟子、即ち佛敎の修行を續けて行くもの。「婆羅門」は佛敎以前から印度にありました天を祀ることを業として居る者であります。そこで沙門と婆羅門は同じやうに信仰に入つて居るのだが、何處に違ひがあるだらうといふことは、釋尊當時から相當に問題になつて居つたらしい。お弟子がその事をお釋迦様にお尋ね申したこともある。私共は沙門となつて佛弟子の一人になつて居る、婆羅門といふものも随分學問のある者もあれば、徳の高い者もあるのだが、一體私共が佛様のお弟子になつて居る意味はどういふ意味でせうか、といふことを釋尊にお尋ね申しました。「沙門」といふのは印度の言葉で、支那の言葉に翻譯すれば「勤息」といふことになる。勤めるといふのは、自分が佛の境界に到達するまでは努力を惜まないといふこと。

努力する。少しばかり解つたからといつて進歩を緩めることをしてはならぬといふ點を、何時でも忘れないやうにしなければならぬと思ひます。今この所はそんな深い意味ではなく、唯並べて説かれたのみであります。沙門、婆羅門といふ言葉が出ましたから、この點に就て自分達の用心すべき點を述べて見たのであります。

我昔曾て二萬億佛の所に於て、無上道の爲の故に常に汝を教化す

(我昔曾於二萬億佛所、爲無上道故、常教化汝)

釋尊はこの世に生れて教を説いてからは四十年か五十年のやうだけれども、モウ遠い／＼昔の佛様の時代から、實はお前達に教を説いて居つたのだといふのです。その教を説く場合に、何時でも「無上道」と説かれた。いゝ加減な所で止めるとは言はれなかつた。一番上のこと、即ち凡夫の迷ひをスツカリ取

息めるといふのは、さうは言つても折々迷ひが出て来るから、その迷ひを防ぐことです。その勤息を志として居る沙門と、婆羅門の人々との違ひが何處にあるかといふことを釋尊にお尋ね申した時に、釋尊のお答へは、「勤加精進」、勤めて精進を加へるといふことが、自分の弟子の婆羅門とちがふ所であると仰せられた。婆羅門でも善い事はするだらうけれども、自分の弟子たる者は善くなればなる程ますます努力を増す。勤めて精進を加へるのである。善くなつたからといつて油断してはいけない。善くなつたならば善くならない前よりもモツと精進を加へて行く。それが沙門即ち自分の一門の特色でなければならぬといふことを諭されたのであります。なか／＼それが難かしいことで、少し善くなりなすと氣が弛み勝ちになるのであります。私共は聊かなりとも佛様の教を學んで居る以上は、沙門の心持でなければならぬ。即ち解つたら解つただけ一層

除いて、佛の境界にまで行くといふことを目標にしてお前達を教へて来たではないかと斯う言はれた。

お經を読む場合に、所々を飛び讀してはいけないと申すのはこの事です。壽量品になつて急に久遠の佛を説いてあるのではない、こゝに既に其の思想が現はれて居る。自分は四十年や五十年以來お前を教へて居るのではない。遠い昔からお前達を教へて居るではないか、その遠い昔から教へた續き、今この世に生れて以來の四十年、五十年の教であるといふことを、此處にハツキリ言つてある。經の中は今まで言はないことがバツト急に出て來るといふことは無い、前から準備的の説が重つて來て、結局壽量品のやうなものが出て來るのでありますから、お經を読む時に飛び讀してはいけない。「壽量品が大事故」と言つて、壽量品になつて急に久遠の本佛が飛出したやうに思ふのは間違ひで、お經を丁寧に讀んで見れば、前々から既にさういふ思想が現はれて

来て居る。ズット遠い昔からお前達を教へて居る。それには無上道を教へて居る。「無上道」は佛に成る道である。佛に成るといふ目的で修行しろ、いゝ加減な所で止つてはいけないぞといふことを趣意として汝達を教へて来て居るといふのです。

汝亦長夜に我に随ひて受學しき 我方便を以て汝を引導せしが故に、我が法の中に生ぜり

(汝亦長夜 隨我受學 我以方便 引導汝故 生我法中)

汝も亦永い間自分に随つて教を受けて来て居る。併しながら何にしろ教といふのは聴く人の機根に應じて説かなければならぬのであるから、最初から無上道といふやうな事を打ち明けては説かず、種々の方便の説を重ねてから初めて、眞實の事を説いたのである。それは此の世に於て四十餘年來説法して来た順序であるが、前の世から其の通りであつた。舍利弗は左様にして教へられた縁で、今また釋尊の脚

弟子となつたのである。「我が法の中」といふのは自分が教を説いて居る今の場合といふことで、前の世からの縁によつて今又此の世で師弟になつたのだと仰せられるのであります。

舍利弗 我昔汝をして佛道を志願せしめき 汝今悉く忘れて、便ち自ら已に滅度を得たりと謂へり。

(舍利弗 我昔教汝志願佛道 汝今悉忘 而便自謂已得滅度)

舍利弗よ、前世に於てお前に佛に成る道を學ばせて居つたのだが、お前はそれを途中で忘れてしまつて、今は低い方の教を求めて居るのではないか。途中で忘れてしまつたといふのは、妙なことを言はれるやうであります。私共は確かに途中で忘れて居るのであります。そも、吾々が生れた時のことは全く覚えて居ないのであります。稚かつた時のことを考へて見ると、吾々が小さい時には人と自

分の區別は立てなかつた筈です。子供の時はど「共に」といふことを考へて居ることはない。これは誰でも

子供の時のことを思ひ出して見れば分る。小さい時には自分一人の事を決して考へては居らない。何か珍らしいものがあればお母さんを引張つて来て一緒に居るといふやうに「共に」といふことばかり考へて居る。それが佛に近い心です。小さい自分といふものに囚はれて居はしない。一切の人と共に榮えて行きたい、「共に」生きたいといふのが正しいのであつて、吾々でも小さい時は、其の位の料簡を持つて居つたのだから、少し大きくなつて世の中に揉まれるに従つて、「共に」といふことは忘れて、「人はどうでも自分さへ宜ければ」といふことで今日まで来た。だから忘れて居つたと言つて間違はない。ドウもだん／＼人間が利巧になるといふことは、一方から言へばだん／＼初めの性質に遠ざかつて行くといふ事かも知れない。本来の人間の性質といふものは

佛のお心持と一致したものであつて、即ち吾々がこの世に生れて来る時から、既に佛の教を心にすべき者として生れて来たものだと思へても宜い譯です。それをツヒ離れてしまつてだん／＼遠ざかつて行くその事を今覺醒して下さるのです。一體お前達は前の世から佛に成れと言つて教へたのに、途中で忘れてしまつたではないか。さうして少しばかり教を學ぶと、世間を離れて自分一人で淨らかな生活をする位なことを覺えたと、それでモウ澤山だと思つて、「自ら已に滅度を得たり」これが本當の覺だなどと思つて居るが、それは飛んでもない話である。

我今還りて汝をして本願、所行の道を憶念せしめん 汝今還りて汝をして本願、所行の道を憶念せしめん 諸々の聲聞の爲に是の大乗經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説く

(我今還欲令汝憶念 本願所行道之故 爲諸聲聞說是大乘經 名妙法蓮華 教菩薩法 佛所護念)

そこでモウ一遍お前をして昔の心持がどんなものであつたか、その時の性質がどんなものであつたかといふことを憶ひ出させてやる。その事をモウ一遍心に思ひ浮べさせる爲に、今こゝで教を説いたのであると、斯う言はれるのであります。

本願といふことは、前にも一度申しましたけれども、これは佛教ばかりに限らずとも宜しいが、一切の修行をする場合に於て、完全を期するといふことは當然の事です。つまらない例のやうですが、吾々が子供の時に鉛筆を持つて棒を引く時に、真直な棒を引かうと思つてやる。然るに真直な棒といふものは人間界にありはしない。皆曲つて居る、どんな定規を持つて來ても、どんなに烏口の先を細くしてやつて見ても真直な棒は引けやしない。凡そ人間の引く棒は皆曲つた棒で、本當の直線は誰も引けやしない。それなのに子供の時には真直な棒を引かうと思つてやつて居る、これが非常に尊い事です。不完全な世

の中に生きて居りながら、完全を期して居る。ナニも道も教を知らない子供に「どんな棒を引くのか」と言へば、「真直な棒を引くんだ」と言つてやつて居る。曲つた棒を引きながら「真直に……」と思つてやつて居る。此の氣持は尊いものです。それから世の中に本當に圓いものはないでせう。圓いに似たものはあるが、本當の圓いものはありはしない、太陽も月も曲つて居る、お團子も煎餅も歪んで居る。真圓いものはありはしない。けれども子供が描く時には圓いものを描く積りでやつて居る。それは夢のやうですが、夢ではない、總ての人に共通なものです。だから曲つた線を見ながら真直な線を考へ、いひつ、なものを見ながら圓いものを考へて居るといふのが人間の本性です。不完全な生活をして居ながら完全なものを求めるといふ、それが人間の本來持つて居る性質であります。それが後にだん／＼曲つて來る。世の中を通つて思ふやうに行かないと。自分

で自分を認めてしまふ。真直な棒を引かうと思つても引けないものだから、「少し位曲つても宜いや」……とやつてしまふ。大概の事がさうです。私共のやうに白髪が生えて來ると寂しく諦めてしまふ。「とても思ふやうに行きはしない。子供の時に考へたのは大概夢だ、マアこの邊で……」と認めてしまふ。それは實は草臥れてしまつたからそんな事を考へるので、實にはかない話です。實際人間は本來完全なものを求めて居る、その完全を求むる所から言へば今佛道を學ぶ者の本願としてあることは、すべての人がすべての仕事をやる時の根本でなければならぬといふことになります。

『本願』とあるが、此の願といふのは只の理想とか只の希望とかいふことではなくて、之をキツト實行しよう。是非成し遂げようと思ひ詰めたものが願であります。『願をかける』などと言つて、普通には宜い加減に願といふ字を使ひますけれども、本當は

さういふ意味です。只の理想ではない。只の理想ならその理想が外れさうなら止してしまふ。只の希望なら、その希望が達せられない時には止めてしまふけれども、どうしてもやらう、命に懸けてもやらうと或る事柄をシツカリ思ひ詰めた時にそれが願といふことになる。だから願といふものは非常に尊い事です。佛教の修行をするには、無論願を持たなければならぬ。初めはそんな積りでなく、面白半分にやつても宜いのですけれども、結局は願を立てなければならぬ。「解つたら解つたその時のこと、解らなくても元々だ」といふやうな料簡では到底駄目ですから、願を立てなければならぬ。そこで願を立てるのに「總願」と「別願」といふものがある。(本願といふのはこの總願と同じことです) 總願といふのは、苟くも佛の道を學ぶ以上は誰でも持たなければならぬ願であります。併しながら人間の境遇事情、社會の状態が皆異ふのでありますから、その自分の境遇

に應じ、周囲の状況に應じて、また特に此の事に力を用ひようといふ特別の點が考へられるのも良いことで、それを別願といふ、日本に生れたから日本に生れたところで一つ願を立てよう、印度に生れたから印度に生れたところで願を立てよう。商人の家から生れたら商賣しながら、役人になつたら役人をしてながら、何でも自分の境遇、自分の周囲の事情に應じて特別に此處からやらうといふ、所謂應用的の方面でも申しますか、それを考へることは結構なことでありませぬ。佛教は決して空想ではありませぬから、根本として佛教を學ぶ以上誰でも持たなければならぬ願と、その人の境遇、事情に應じて特に立てなければならぬ願とが、兩方ある譯です。それが總願と別願です。その別願を輕んじてはいけません。總願の方はかりやつて居れば空想になつてしまふ。少し言ひ悪いことですけれども、我國の佛教、殘に徳川時代の佛教に於て別願の方を輕んじて來たといふ

ことは非常な間違ひだらうと思ふ。「苟くも佛弟子としては……」と言つて、皆に共通なことばかりやつて居る。それも宜いけれども、それだけではいけないのであつて、その人の境遇に應じて特に力を用ひる點がなければならぬ。百姓は土を掘りながら何か善い事をしなければならぬ。商人は算盤を弾きながら何か善い事をしなければならぬ。その人の人の特別の場合に於て一番適切な方法を考へて行く。それが別願であります。そこで別願の方は、例へば阿彌陀様の願が幾つあるとか、藥師如來の願が幾つあるとか、二十あるとか三十あるとかそれ〴〵に異ひます。それは別願でありますから、それ〴〵に皆尊い。併しながらどの佛にもどの菩薩にも、又吾々凡夫であつても、苟くも佛道を修行する以上は一緒に持たなければならぬ願がある。その總願は四弘誓願といつて有名なものであります。四つありませぬ。

衆生無邊誓願度
煩惱無數誓願斷
法門無盡誓願學
佛道無上誓願成

これは宗旨に依つて言ひ方が少し異ひますが、精神は同じことです。これが總願で、この願がなくて佛教を學ぶなどといふことは道樂仕事に過ぎない。眞面目の事ではない。どこでこれがなかく出来さうもない事なのです。「衆生無邊誓願度」——人間は數限りない程あるが、それを皆救ふことを誓願とする。そんなことは出来るものではないと思はれる。一人の力で無限の人間を救ふといふことは出来るものでないと思はれる。けれどもそれは必ず出来る。何故かと言へば、人の心と心とは必ず感應し合ふものだから、自分が現在の三十年か五十年の生涯に於て無限の人を救ふことは出来ずとも、無限の人の救はれるその道に聊かなりとお手傳ひをして

居るならば、つまり自分の努力が無限の人を救つたことになる。吾々の望みはそれでなければならぬ。吾々が佛教を學んで人に説く場合に、限りある人だけを救ひたい、限りある人にだけ役に立てたいと思つて居ては、本當の事は説けない。自分の今此處で説くことは總ての人に役に立ち、總ての人を救ひ得る力のあるものと思ひますから、佛の説かれたことのお取次が出来る譯です。だから現在の自分の一生の三十年五十年に於て説く此の教は、無邊の數限りない衆生を救ひ得る教だと、斯う思つて説くのでなければ、教を説くといふことにはならない譯です。さう思へば衆生の無邊なるものを度せんとする誓願大理想を立て、教を學ぶといふことは結構なことでありませぬ。

それから「煩惱無數誓願斷」、これも煩惱といふものは數限りなくあるのだから、その煩惱を悉く斷ち切るといふことは出来ないやうだけれども、併し

ながら煩惱といふものが要するに何處から起るかと言へば、小さき自己を中心として物事を考へる所から起る。煩惱には怒るとか、嫉むとか、憎むとか、欲しがるとか、惜しがるとか、色々ありますが、その根本を究めて見ると、小なる自己を中心として物事を考へるところから来る譯です。だからその小さな自己を中心とするといふ考へがスツカリ根本からなくなつてしまへば、どんな迷ひも起り得ないのであります。迷ひが限りなくあつても、結局それを断ち切ることが出来るといふことを理想とするのは尤もなことであつて、迷ひの数はいくら勘定しても限りがないが、その根本が無くなれば迷ひの起る譯がない。さう考へると此の誓願も必ず果されません。

次に「法門無盡誓願學」、これこそ無理な事とも思はれます。法門といふのは斯うお經の中に書いてある佛の教ですが、その教は盡さることがない程あるそれを皆學んでしまふ、そんなことの出来るもので

はない。お經を一通り讀むだけでも一生涯掛る。けれども能く考へて見ても、どれ程澤山の教があつても、歸する所は一つでなければならぬ。一つの事が根本からよく解つたら、他のものは讀まなくても解る。そこをよく考へなければならぬ。大きな木があつて、その木に梅の花が咲いて居る。その梅の花は何百か何千かあるだらうけれども、その一つの梅の花を取つて香を嗅いで「こんな香がするナ」と思へば、他の花は皆同じ香であります。日蓮聖人が「一華を見て春を推せよ」と仰しやつたのはそれである。「この花の香は判つたが、向ふの花はどうだらう、あの花は違ふかも知れない」……、そんな心配をするには及ばない。又海の水は數限りない程あるが、岸の方の水を掬つて舐めて見て鹹ければ、沖の方の水も鹹いといふことが判る。日蓮聖人が「一滂をなめて大海の鹹を知れ」と仰しやつたのはそれである。「この邊は鹹いが、向ふの方は甘いぢやないか」

といつて極めて歩く必要はない。だから教は數限りなくあらうけれども、その教の歸着するところが一つである以上は、一つの教を徹底的に學ぶことに依つて未だ學ばざる所も學び得たと思つても宜い筈であります。

それから「佛道無上誓願成」、佛に成る道はこの上も無く高いものであつて、今の自分には及びもつかぬだらうけれども、結局佛に成りきるまでは努力をやめまいといふ考へで居なければならぬ。佛に成ることを誓願としようといふのは此の意味であります。

さういふやうに考へて見れば、この四つのことは要するに自己の完全を期することである。人間がどんなに澤山あつてもみな教はう、迷ひがどれほどあつてもみな無くしようといふことは要するに完全を期することです。私共が修行をするのは、今の自分は力が足りないけれども理想とする所は完全を期す

ることではなければならぬ。チョット子供が棒を引く時に、真直な棒を引かうとするその心持です。それが根本になつて行けば宜い、中途で諦めてはいけない。「とても真直な棒などは引けはしないから、曲つて宜からう」……そんな料簡になつたらお終ひですから、どうしても吾々は完全を期するといふ心持を失はないやうにしなければならぬ。それが「本願」即ち根本の願であります。その根本の願に基いて色々な行ひをするのでありますが、ウツカリすると忘れ勝ちになりましますから、それを常に憶ひ出すやうにしなければいけない。

それを憶ひ出させる爲に、諸の聲聞の爲に大乘經を説いたと言はれる。「聲聞の爲に」、といふこの言葉は面白い言葉です。前の方便品の中には自分の弟子は皆菩薩で、「聲聞の弟子なし」とありましたこれは矛盾して居るやうです。前には聲聞の弟子なしとあつたのに、此處には聲聞の爲に大乘經を説

いたといふのですから、言葉の上では矛盾して居る併し「聲聞の弟子なし」といふことは理想を言つたので、「聲聞の爲に」といふことは現實を言つたのです。今のところは聲聞といつて、唯た世の中の無常を感じて世間に囚はれない心持をもつて居る者などが多いのだが、さういふ者でもだん／＼と修行して行けば、結局菩薩の修行が出来て、佛の境界に行ける。だから釋尊の頭腦の中では、聲聞の弟子などはないと思つて居る。今の所は聲聞グラヒの事をやつて居るが、その人間をだん／＼説いて菩薩の道を実行させるやうに努めようと思ふのだと、斯ういふことであります。ですからお經の言葉が矛盾して居るやう見えるのが非常に面白いのであつて、或る時は現實を説き、或る時は理想を説かれる。これを比べ合せて見ると、何處からどう歩いて行くのだといふ、その道筋が判る譯であります。それで聲聞の爲に教へるといつてある。菩薩の修行をして居る者は

結構だが菩薩より下の、世間の無常を觀じた程度の者に對しても、自分は今こゝで言ふやうな法華經を説くのだ。即ち人々が皆佛と成る大理想を以て修行しなければならぬといふことを説くのだといふのであります。

「妙法蓮華」といふことは、この講義を始める時に一應申しましたけれども、お釋迦様の口から「妙法蓮華」と仰しやつたのはこれが初めてですから、また一通り申しませう。「法」といふことには前にもいつた通り三つの意味があります。即ち法則の意味と、教法の意味と、真理の意味とがある。今こゝでは其の三つの意味を籠めて「法」と言つて居る。普通に法といふのは法則の意味で、朝は何時に起きる夜は何時に寝る、二十一歳になつたら徴兵検査を受ける、夏は單衣を着る、冬は綿入を着るといふやうに、人間の定められたさまりで、それが先づ法といふ意味です。ところがそれは便宜的に定めただけだが、そ

の定めただけで、其の根柢がなくなつてはいけません。更に進んで言へば法とは即ち教法で、人間として斯うすべきものだを教へる。それを教へることに依つて初めて人間の心が揃つて、その法則を実行して行ける譯ですから、法則の基本は教法にあることは申す迄もない、ところが此教といふものが何故立てられるかと言へば、佛様が自分で勝手に工夫して立てたのではない。人間は人間としての本性があり、宇宙萬有として本來の性があるから、その根本の真理に基いて教を立てたものである。だから教法は絶対の真理を基礎として居るのだと言へる。それで「法」といふときには三つの意味が一緒になつて居る。規則といふ意味、教といふ意味、絶対の真理といふ意味の三つが揃つたものが法であります。國の法律などが時々變るといふのは、それは世の中が不完全で、不完全な人間を相手にしてやるのだから、絶対の真理などでやつて居つたら法律が行はれない。だ

から國の法律は時の宜しさに随つて變る。併し宜しさに随つて變りながら、結局は絶対の真理に一致するといふことにならなければいけない譯です。

だから法といふ言葉を淺く見れば規則といふ意味、モウ少し深く見れば教法といふ意味、モウ少し深く言へば絶対の真理といふ意味、或は實在といふ意味に取つても宜い。その三つの意味をスツカリ含めたものが所謂法でありますから、「法」といふことを外國の言葉に譯せないといふのはそこです。英語や獨逸語に譯さうと思つても譯せない。今は仕方がありませんから、英語などに譯すときには「法」を(Law)と譯して居りますが、ローは法律の意味で其他の意味が現はれない。

此の法といふものは、實に尊いものであつて、何でも言ひ様のないものであります。併しながら強ひてこれを形容致すならば、「正」と「徧」でせう。正しいものであつて、總てに行きわたつたもの

である。そんなことでは言ひ盡せないかも知れないが、若し人間の言葉で假に説明するならば、「法」なるものは正しいものであつて、さうして徧く如何なる場合にも行きわたるものでなければならぬ。曲つたものではない。又徧つたものであつてはいけない。だからこれは後に申しますが、佛の智慧のことを「正徧知」と言ふ。正しく徧く知るのでなければならぬ。本當に正しいもので、而も徧らない、如何なる場合にも當嵌るやうな徧きものでなければいけないといふのでありすが、此の「法」といふことを姑く「正徧」といふ言葉を使つて置きます。又その正と徧とを若し一字で言へば、これは「妙」である。だから「妙法」といふことは正徧の法である。若し妙智といへば正しく徧く知る力である。それが徧つてはいけない、が正しくても、狭かつた日には役に立たない。又徧くといつても中心がなくて唯だあれもこれも知つて居るといふのでは仕様がな

いから、正しくして徧くなければならぬ。その正しく徧くといふことを若し別の言葉で言ふならば「妙」である。それが「妙法」である。今こゝではその妙法を説いて居る。正しいことを説いて居る、徧きことを説いて居る。本當に中心を失はない、さうして如何なる場合、如何なる人、如何なる時にも決して當嵌らない事のないやうなことを説いて居る。さういふことが妙法を説くといふことであります。

そこでその妙法はどんなものだと云つても、妙は妙だから説明の仕方がないけれども、それを假に眼の前にある物を以て形容するならば、例へば「蓮華」の如きものだといふのです。斯う言ふと所謂宗門の専門家がキツと叱言を言ふでせう。「イヤそれはそんな譬へだけではない、蓮の華といふものは華が咲いて居る時にチャンと實が成つて居る、因と果とが一緒に在る」といふやうな難かしい事を言ふでせうけれどもそれは後からくつつけた理窟、理窟を附け

れば幾らでも理窟は附く。併しながら妙なることを譬へて言へば、眼の前に現れたものの中で、印度では蓮の華より外にないので、「法の妙なること蓮華の如し」、「蓮華の如く妙なる法」それで宜いのです。華と實が一緒にあるとか無いとか、それは後から附けた理窟でありす。そんなことを言はないで「妙」といふことで盡きて居る。正しく徧して盡きて居る。それ以上言ふ必要はないけれども、それでは餘り抽象的でありすから、法の妙なること譬へば蓮華の如きものであるといふので、「妙法蓮華」と言ふ。

これは印度を歩いて見ると成程と思ふのですが、蓮の華の美しいことは實に吃驚する程です。印度といふ所は泥の色が汚い、茶色のやうな黒っぽい色でさうして暑い所ですから（北の方へ行くと暑くないが、南の方は大部分暑い）仙人掌見たやうなトゲトゲの草が一杯生えて居る。池の水でも川の水でも澄

んだ水は殆んどなくて、皆泥水です。何處を見ても汚い物ばかりです。山や川を見ると大きいといふ感じは受けません。けれども清らかななどといふ感じは少しもない。さういふ風に眼に觸れるものみな汚い中に蓮の華だけが綺麗な色で水の上にバツと咲いて居る。赤いのがあり白いのがあり、私は黄色いのは見ませぬでしたが、黄色いのもあるさうです。それから青いのがあり、青いといふのは水蓮のやうな青い色です。これが水面に浮いて居る。東京の不忍池の蓮のやうに高いところに咲いて居るのではない、水面に浮いて居る。それは實に綺麗なものです。蓮の葉も水面に浮いて居る、上まで伸びないで葉が水面に浮いて居る、さうして同じ水面に今の美しい華が咲いて居る、實にそれは夢のやうです。周囲の汚い物の中に、タツタこれだけ綺麗なのです。それで蓮の華の上に坐りたいといふやうなことが古い本に書いてあるが、私は子供の時から不思議だと思つて居

た。不忍池の蓮を見ると華は高いところに咲いて居る。あんな高いところに並んで坐つたら轉つてしまふだらうと思ひましたが、印度に行つて見ると成る程坐りたくなる。あの水面に平らにある葉の上に並んで坐つたら良い氣持だらうと思ふ。それは行つて見なければ判らない。實に印度の蓮といふものは綺麗なものです。あれを見ると成程法の妙なること蓮の華のやうだといふ意味がわかる。又法華を讀んで行くとき、「世間の法に染まざること蓮華の水に在るが如し」とありますが、全くその通りで、汚い泥水の中に蓮の華だけが泥に染まないうでバツと咲いて居る。成程これを以て佛、菩薩の高いのに譬へられたのも無理はないナといふことを痛切に感じます。それで私は色々な學者の説もあるけれども、そんなことは後から附けたことで、法の妙なること蓮華の如しといふこの意味で充分だと思つて居ります。

持し 菩薩所行の道を具足して 當に作佛することを得べし

(舍利弗 汝於未來世 過無量無邊不可思議劫 供養若干千萬億佛 奉持正法 具足菩薩所行之道 當得作佛)

舍利弗よ、汝は今自分の説く意味が解つたのだから、未來の世に於て、無量無邊不可思議劫といふ永い年月を経て、その間いつでも千萬億の佛様に供養することが出来よう。此の「供養」といふことは幾度も申したやうに、たゞ品物を捧げるといふことではなくて、佛様の心持を以て自分の心持とする、誓を立てるそれが本當の供養です。昨日も私の友人が死んだので、其の葬式に行きまして、佛前へ花を供へたのですが、その時にも私は、たゞ花を供へるだけではないぞ、本當の供養をしなければいけないぞといふことを申したのでありますが、品物を供へるだけならそれは「利供養」といふことになる。

る。菩薩の菩薩として行ふべき道を教へるのが法華の護念である。さうしてそれは「佛所護念」、佛様の護念するところである。護念といふことは大事にすること。何でも善いものは大事にしなければいけない、いゝ加減にやつてはいけない。輕便主義、便宜主義は碌なものではない。これは佛様の本當の心を打明けたものだから、佛様が護念して大事にして居る、いよ／＼といふ時でなければウツカリは説かない。

さういふ尊い教を、自分は今この聲聞といふやうな低い方の覺りを聞いた者の爲にも説いてやるのである。それだから舍利弗よ、自分の説くこの教、即ち菩薩の行を積んで結局佛の境界にまで行くやうにといふ教の解つたお前は、實に頼母しいものだと言はれる。

舍利弗 汝未來世に於て、無量無邊不可思議劫を過ぎて 若干千萬億の佛を供養し 正法を奉

(利とは品物のこと)。品物を供へるにつけて、その人の生きて居つた時のことを想ひ出して、心から有難い、尊い、慕はしいといふ心持をもつて禮拜するならば、それは「敬供養」であります。それからたゞ敬ふ心持を形に現はすだけでなしに、その亡くなつた人の喜ぶやうな行ひをしようといふ心持を本當に持ちますならば、それは「行供養」であります。この三種が揃はなければ本當の供養ではない。花一つ、團子一つ供へる場合にも、どうかこの三つの心持が揃ひたいものです。たゞ「親父の命日だから面倒くさいけれども團子でも上げよう」といふのでは困る。或は又ひどいものになると、法事にお客さんを招ぶことばかり主にして、「彼處の家は何人お客が来た」と言はれて喜んで居るといふのは淺間しいことです。本當に供養をするには品物も結構だが、亡くなつた人のことを想ひ出して、心から尊敬をする心から慕ふといふこと。尙ほそれだけではいけない

から、その亡くなつた人が喜ぶやうな行ひをしよう
と誓ふ。これであつて初めて本當の供養になる。

それで「智度論」といふ書物の中にはそのことを
論じて、若し家が貧しければ利供養は出来ない。花
を供へたいと思つても花は買へない、園子を供へた
と思つても園子を買ふ金が無ければ仕方がない。
せめては後の二つだけをやれ。併しながらそれも自
分が病氣で寝て居るやうな時には掌を合せて拜むこ
とも出来ない。起上つてお辭儀も出来ない。さうす
れば敬供養を止めるのも已むを得ない。たゞ行供養
だけは、どんな事をしては是非やらなければいけな
いぞといふことを説いてあります。これは本當に
さうあるべきです。ところが世の中を見るとこれが
逆になつて、行供養や敬供養はごうでも宜い、品物
さへ供へれば宜いといふやうなことが主になつて居
るのであります。これは困つたことであります。
一月半ばかり前のことであります。或る家で亡く

る」即ち佛の境界に到達することが出来る。斯うい
ふのでありますから、佛に成るといふことはなかな
か容易な事ではない。

號をば華光如來 應供 正偏知 明行足 善
逝 世間解 無上士 調御丈夫 天人師 佛
世尊と曰ひ 國をば離垢と名けん

(號曰華光如來 應供 正偏知 明行足 善逝 世
間解 無上士 調御丈夫 天人師 佛 世尊 國
名離垢)

そこでその佛に成つた後には、即ち華光如來とい
ふ名の佛に成るだらう。この佛の名前といふのは、
佛の具へて居る徳を何かの言葉に現はすので「華」
と言ふのはいつでも徳を華に譬へる。華嚴經などと
いふのも、華を以て嚴るといふ意味で、佛が有らゆ
る徳を具へて居られる状態を華にたとへて謂ふ。そ
の徳が自から周圍を照しますから、「光」といふ字
を加へて、華光如來と申したのであります。『如

なつた親父の三回忌をやつて、大勢お客を招待して
御馳走したところが、酔拂つて喧嘩が始まつて、何
の爲の供養だかわからなくなつてしまつた。形式だ
けは大層立派で、會席料理でお酒が出て結構であつ
たが、それは唯だ利供養で、敬供養も行供養も滅茶
滅茶になつたといふ例があります。世間にはそんな
事が少くない。

本當の供養は行供養ですから、佛に供養するとい
ふのも、佛様に感謝して、佛様の教を守つて、それ
に背かないやうな行ひをする。それを續けて行くこ
いふことが、即ち千萬億の佛に供養するといふ意味
であります。それで初めて自分が本當に佛の境界に
進むことも出来る。さうして「正法を奉持し」、佛
の正しい教を身に持つて行くのであります。それを
大事に持つて、「菩薩所行道」、菩薩として實行
しなければならぬ種々な行ひを具足して、少しも
缺くる所のないやうに實行した、その結果「作佛す

來」から以下は前の序品にもあつた佛の十號であり
ますが大切な事であるから大略をモウ一度いひませ
う。「如來」といふ言葉は種々な意味で言ひますが
根本の意味はいつでも來て居るといふことです。い
ろ／＼説明を附けると面倒なことになるのでありま
すが、「如」といふ字は「常に」といふことで、常
に來て居る、それが本當の意味で、いつでも吾々の
人間界に來て居る。肉身の佛様は何年か経ては滅く
なるだらうけれども、吾々が心に佛を念する時に於
て、吾々の心に佛の力が通つて居る。世に正しい道
が行はれる時に於て、その正しい行ひの中に佛の力
が通つて居るのであつて、佛はいつでも人生と縁を
有つて居る。佛の居ない時はありはしない。それが
「如來」の本當の意味です。常に來て居るといふの
だから、流行り廢りは更でない。何か一方に秀でた
人はあつても、昔は盛んでも今は廢れた者もある。
ところが佛様のお教へになる事は千萬年を通じて變

らないものだから、いつの日、いつの時でも、一たび佛を念ずる時、佛はそこに現はれる。それだから「如来」である。

それから「應供」は供養を受くべき者といふことで、これは佛より外にない。供養といふのは前に申したやうに感謝の心持を形や行ひに現はすことでありませんが、その供養を受くべきものは佛以外にはない。私共は全くお禮を受ける資格はないのです。何故なら善い事も言ふけれども、間違つた事も言ふ。人に對して親切な心持があつても、その親切な心持の中には何か自分の勝手が混るものですから、さういふ人間が言うた事の全部に對してお禮を言はれる筈がない。一時間お話をして、その中には少しは善い事も言ふかも知れないけれども、碌な事を言はないこともある。「この間は大きに有難うございました」と言はれても、何處がどう有難いかわからない。況んやお禮の品物などを持つて來られてはいよいよ

まごついてしまふ。吾々はお禮を受ける資格はありはしない。間違だらけの人間ですから、善い事も言ふだらうが、悪い事も言ふ。正しい事も言ふだらうが間違ひも言ふのだから、吾々はお禮を受ける資格はない、親が子供を育て、子供から感謝されて居るのが當然だと思ふが、子供を産んで育て、二十か三十になる迄の間、常に子供の事ばかり考へて世話してやつたかといへば、決してさうはいかない。時々親の自分勝手な事も考へる。さうして見るとお禮を受ける資格はないかも知れない。實際人間が自分といふものを全く捨て、人の爲に力を盡したらお禮を言はれる資格があるだらうけれども、さうでない限りは本當にお禮を言はれる資格はない筈です。佛のみは眞の大慈悲心をもつて、一切衆生を吾が子として救つていらつしやるのだから、佛に成つて初めて「應供」で、供養を受くべきもの、禮を言はれる筈のものだ。斯う認められる譯であります。

少し私の言ひ方が亂暴であつたかも知れませぬがそれならば人間はお互ひにお禮を言ひ合ふ必要はないか、「ナーニ親切といつても、自分の勝手が入つて居るのだから、お禮を言ふ必要はない」といふのでは、それでは人生は滅茶々々になつてしまふ。私共は人に善い事をした時には、お禮を受ける資格がないと反省しなければならぬが、人の善い事に對しては、その人の他の行ひがいくら悪からうとも、少くともその事については佛様と同じだから、その點に對して禮を言つたら宜い。それは間違ひだらけの人であつても、その人が自分に對してやつて呉れたその事柄は、佛様が吾々をお救ひ下さると同じ所がある。吾々でも朝起きてから夜寝るまでの間に、一分か二分か佛に近い心持になることもある。その點に對してはお禮を言つても宜いし、尊敬しても宜い譯でせう。だから餘りぶち毀しにならないやうに、人の善い方だけ認めて禮を言ふ事は一向差支ないこ

とであるが、お互ひが自分に對してはお禮を受ける資格がないと反省しなければならぬ。他の人の善い事に對してはこれを認めて、悪い事は略して禮を言つても宜い譯です。たゞ佛様のみは本當に如何なる場合でも禮を受けることが出来る。ですから佛を應供といふ。

それから「正偏智」は前に申したやうに本當に正しく物事を知り、さうして偏く如何なる場合でも當嵌ること。佛は如何なる場合でも變らないところの絶対の眞理を體得し、永遠の正しい道を知つて居られる。

それから「明行足」の「明」は智慧の方、「行」は實行の方で、智慧と實行とが具足して居るといふこと。これも佛様でなければ出来ない。人間はドツチか先に行き過ぎて居る。無論知つて行ふに越したことはないが、知つても行へない、或は行ひながら知らないこともある。本當に知つて本當に行ふとい

ふことは難かしい。まア知つて行はないのが普通だと考へられて居るけれども、必ずしもさうではないので、或は久しい習慣に従つて、折角善い事をしながら、その事の意味が解らないで、やつて居る事が随分ある。だから吾々は知つて行はない場合もあるし、行つて知らない場合もある。それが兩方揃はなければ本當ではない。佛様でありますれば、本當に知つて本當に行つて居らつしやるから、即ち明行足で、いつも智慧と行ひとが揃つて居る。

それから「善逝」、逝とは世間を離れること、善とは完全無缺の意味ですから、即ち完全に世間の煩ひを離れ盡したものが善逝です。その完全といふことが實に難しい。世間の煩ひを一部分離れることは吾々でもやりますけれども、少しく世間に煩はされない境界になつた時に、「俺は世間に煩はされないから偉いな」と思ふ、それはいけない。それはやはり世間を考へて居るからそんなことを思ふので、

はり欲しいので、夢ではない。佛様になつて初めて世間に煩はされない。さうして自分は世間に煩はされないといふことも考へて居ない。それが本當の善逝です。

それから「世間解」、世の中の事を一つ一つ詳しく知りわけて教を説かれる。自分が悟つて見ると世間が煩はしくなるものであるが、煩はしいと思つて世の中を離れて居つては教は説けませぬから、善逝で自分は世間に煩はされないが、世間のことは皆よく呑み込んで、一々適切なる教を與へる。これが所謂世間解です。どうも少し悟つて來ると潔癖になつてしまつて、「どかく世間はうるさい……」ナンと言ひたがる。それでは人を教ふことは出來ない。だから自分は世間の煩ひを受けないけれども、世間の人の細かい事までよく理解してやる、斯ういふことが必要であります。大人になると子供のことはわからないものです。自分が少し解つて來ると、只の人

本當に世間に煩はされなければ煩はされないのが偉いと思ふ筈もない。人を救つても「救つてやつたナ」と思つて居るなら、やはり自分が中心になる。だからそこはなかく難かしい。

去年の今頃の事ですが、或る人が墓詣りをしたところが、寺男が水を汲んで呉れた。そこで今日は忙しいから任職には逢はないで、こゝで失禮しますといふので、幾らかの金を包んで「失禮ですがこれを一つお寺の方に上げて下さい」と言つたところが、その寺男が「有難うございます、どうぞ私には御心配は要りませぬから……」と言つた。ドウモ能くさういふ事がある。要らないと言ふのは、實は欲しいから要らないと言ふ。世間によくさういふ人がある。「俺は名譽は要らない」などと、大きい聲を出して言ふ人がある。要らなければ黙つて居れば宜い。「イヤ功名富貴などは夢の如しだ」と言ふ。夢の如くなら言はなければ宜さうなものです。言ふだけや

間の言ふ事などは意味がないと思ふけれども、併しその人々には大事な問題なのです。それはやはり考へてやる方が宜い。

それから「無上士」、これは説明するまでもなくこの上もない人といふこと。佛様より勝れた者は全くありませぬから、それで無上士といふ。

それから「調御丈夫」、印度の人は馬に乗つたり、象に乗つたりしますから、野原から引張つて來た野獸のやうな馬や象をだん／＼訓練して、實際の役に立つやうに仕上げる、これを調御といふのでありますが、人間もその通りであつて皆野性がある。各々の性癖がある。皆それ／＼に偏つて荒々しい所があるのを、だん／＼に教へ導いて正しい道に入れて行く。その導き方がいつの場合でも間違ひがないから調御丈夫といふ、佛は本當に間違ひなく衆を訓練する力を備へて居られる。吾々でも少しは人に物を教へて見ることはあるけれども、丈夫どころではない、

甚だ不丈夫であつて、時々こつちが癩癩を起したりする。佛様の教へ方は完全無欲で間違ひがありません。

それから「天人師」天上界も人間界も共に佛を師とする。佛様の起らない前の婆羅門の時代に於ては天上界といふものを人間の理想として居つた。人間界に於ては苦みや悩みがあるが、天上界に行けば苦みもなければ悩みもない。だからこの世に於て善い事をすれば、その報として天上界に生れるといふことを理想にして居つた。ところが釈迦様は、それではいかぬと仰しやつた。苦みがなく悩みがないといふことのみで何の意味があるか。チツトも苦勞がなく、チツトも悩みがないといふのは全くつまらない生活である。今の世の中が苦しいから、苦みがなくなつたら宜いだらうと思ふが、苦みがなくなつて暫く経てば、今度はあまり無事なのがつまらなくなつて不平を起す。さうしてその安樂の状態から墮ち

ものとなつたといふ意味であります。この十號は佛様をお讃め申す言葉であります。佛様をお讃め申すといふことは佛様のためではない、未だ佛に成れない吾々が自ら反省する爲に、佛様をお讃め申すのですから、その積りで考へなければいけない。佛様は何時でも来て居らつしやる。吾々は何時でも人間の中に来て居る譯にいかない。佛は衆の感謝を受けられる。吾々には感謝を受けるだけのことは出来ない。佛様は正しく徧く知つて居らつしやる。吾々は片方しか知らない。斯ういふやうに、佛を稱讃することはたゞ稱讃する意味でなくして、吾々自身の反省の基であるといふやうに考へますと、佛をお讃め申すといふことが意味を有つて来るのであります。そこで佛に成れば今申すやうな十號を具へますから、舍利弗に對して、將來お前は佛に成れば斯ういふすべての性質を具へるやうになるだらう、さうしてさういふ佛の居る國は離垢と名ける。「垢」はけ

てしまふ。だからたゞ安樂といふ事だけでは人間は満足しないのであります。私共のやうに毎日方々に引つ張り出されてお喋りをして居ると、たまに一日喋らなければ今日は樂でいゝと思ふが、此の間少し春中が痛くて二三日引つ込んで喋らなかつたら、何だか淋しくて仕様がな。今日は喋つたら非常に気分が好い、實にをかしいものです。無事といふことは人間に満足と與へない。常に何ものか善事を爲して居るといふこと、自分の努力が何かの意味に於て周囲の人の役に立つて居るといふことに悦びを感じるのが本當の満足です。その外に何の満足もありはしません。ですから天上界の者も人間界の者も、共に佛を師として、共に自分の力が他の者の役に立つて居ることを悦びとするやうな生活をせよといふのであります。

それから「佛世尊」、佛は佛陀を略したので覺つた者といふ意味、佛世尊とは覺つて世の中の一尊といふ

がれのこと、すべての汚れを離れた國であると仰せられた。

其の土平正にして清淨嚴飾に安穩豊樂にして天人熾盛ならん 瑠璃を地と爲して八の交道有り 黄金を繩と爲し 以て其の側を界ひ 其の傍に 各々七寶の行樹有りて常に華果有らん

(其土平正 清淨嚴飾 安穩豊樂 天人熾盛 瑠璃爲地 有八交道 黄金爲繩 以界其側 其傍各有七寶行樹 常有華果)

その土地は清らかで美しく飾られて居る。そこに居る者は天も人も榮えて行くだらうとある。これは人の心が淨らかであれば、その地が淨らかなることいふ意味を現はして居る。境界といふものはその人の心から作られるものでありますから、佛が涯のない智慧と涯のない慈悲を有つて居られるならば、その佛の住んで居られる周囲が自ら淨らかな場所になるといふことは言ふ迄もない。それが即ち極樂淨

土の意味であります。それには形容としていろいろ
 な言葉が使はれてありますけれども、要するにその
 意味です。心が淨らかであつて、周圍が穢ないとい
 ふ筈はない。周圍が穢ないのはまだ自分の力が足り
 ないからである。さう考へなければならぬ。吾々
 は少しばかり善い事をして見てその効果が現はれな
 いと、デキに不平を起すけれども、それはまだ自分
 の力が足りないのだから、そこを反省した方が宜い
 本當に佛のやうな徳を具へれば、その徳を照すこ
 ろ、その力の及ぶところ、自然に周圍が淨らにな
 るといふのは當然の事であります。

それから「八の交道」八といふのは通達無碍で、
 周圍に通じて何處にも障礙がないといふことを形容
 して居るのであります。八といふ數字に四はれなく
 ても宜しい。

さうして七寶の樹がある。七寶といふのは印度の
 昔から數へられて居る寶でありまして、瑠璃とか砵

磲とか瑪瑙とかいふいろ／＼な寶であります。美し
 い樹があつて、さうして常に花も咲いて居れば、實
 も成つて居る。これはつまり淨土の有様です。佛の
 いらつしやる所は即ち淨土ですから、いつでも佛の
 ことを言ふ時には、淨土といふものは必ず附きもの
 であります。

どのお經にも必ず佛を説けば佛の淨土を説くので
 ありますが、法華經に於てもその例に漏れないで、
 これから後にもいろ／＼な人が佛に成るといふこと
 を許される場合に、いつでもその佛は斯ういふ佛で
 その佛の住む所は斯んな美しい所だといふことを必
 ず言はれるのであります。さうしてさういふことを
 積み重ねて来た終りの神力品に至つて、十方世界通
 じて一つになるといふことを言はれる。それだから
 これは實にエライ事です。佛に成れば其の佛の居る
 所は皆美しい所だ、穢ない泥のやうな所はないぞと
 いふことをだん／＼重ねて説いて行つて、さうして

其の淨土といふものはお前達何處に在ると思ふ。十
 方世界通じて一佛土となるのである。吾々の住んで
 居るこの土の上がそれになるのだぞといふことを言
 はれる。だから吾々が此土を淨土にするのだと思つ
 て努力しなければならぬ。しかし初めから「ナニも
 極樂淨土を西の方や東の方に捜すに及ばない」とい
 ふことをイキナリ言ふのではない。「お前達は佛に
 成る、その佛の住む所はこんな所だ」と言ふから、
 これを聞いた人は「そんな所へ行つたら宜からうナ
 と思つて居る。さうしてだん／＼後になつて來ると
 十方世界通じて一つのものである。他に在るのでは
 ない。此土なのだ。お前達の心の持ち方に依つて、
 お前達の住んで居るこの穢ない泥の上、これが極樂
 淨土になるのだぞといふことを言はれるのでありま
 すから、そこに至つて本當に有難い。

經典といふものもいろ／＼ありますが、特に法華
 經に於ては必ず照應がある。首尾相照して一言も無

駄がないのであります。一番初めには「佛と佛のみ
 が本當の事を知つて居つて、お前達には分らぬぞ」
 とある。これは大變だナと思つて居ると、「その佛
 にお前達は成れるのだ」と救ひ上げられる。「極樂
 淨土といふものは清らかなもので、此土とはまるで
 違ふぞ」と言はれるから、羨しいと思つて居ると、
 今度は「この穢ない土の上にそれが出現するのだぞ」
 といふことになる。さういふ風に法華經に於ては必
 ず前後照應がある。だからお經を飛び讀みしては必
 ず經の本當の味ひといふものはわからない。「全部讀
 むのは面倒だから大事な所だけ飛び／＼に讀まう」
 といふのはいけない。尤もお經に依つてはそれで宜
 いかも知れない。例へば四十二章經のやうに、い
 ろ／＼の語を集めて後で編纂したものなら、バラバ
 ラなものだから一部分づゝ讀んでも宜い。けれども
 法華經といふものはさういふやうに寄せ集めた經で
 はなくて、經としての組織を立て、出來たお經であ

りますから、斯の如き組織を立てたお経に於て、飛び読みをすることはいけないのです。と言つて毎日全體を読むことは出来ませんけれども、法華經は如何なるものかといふことを知りたいならば、どうしても飛ばして讀んで本當の事は判らないのであります。無駄に言つて居るやうな事が實は無駄ではない、何處かに其の照應する所が出て来る。壽量品に行つてイキナリ久遠實成が出て来るのではない、前の方からだん／＼にせり詰めて行つて、さうしてその結論とも言ふべきものが現れて来る。凡て斯ういふ風でありますから、よく氣を付けて讀んで行く。無駄のやうに見えたことが一つも無駄でない。チヨウド名人が碁を打つやうなもので、何故あんな所へ打つのかと思つて居ると、後になつてチャント生きて来る。無駄に一目も打ちはしない。さういふところが此の經典を讀む者の實に有難く思ふところであります。

華光如來亦三乘を以て衆生を教化せん 舍利弗 彼の佛出たまはん時は惡世に非ずと譽め 本願を以ての故に三乘の法を説きたまはん 其の劫をば大寶莊嚴と名けん 何が故に名けて大寶莊嚴と曰ふ 其の國の中には菩薩を以て大寶と爲すが故なり

(華光如來 亦以三乘一 教化衆生一 舍利弗 彼佛出時 雖非惡世一 以三本願一 故 説三乘法一 其劫名大寶莊嚴一 何故名曰大寶莊嚴一 其國中 以菩薩一 爲大寶一 故)

さうしてお前が華光如來といふ佛になるのだが、その華光如來となつた後も、やはり三乘といつて、聲聞、緣覺、菩薩といふ三種の教を説いて、大勢の人々を教化することになる。いつでも佛の教は一種ではない。方便の教と眞實の教がある。方便の教といふのは、眞實の教に大勢の人を導き入れる爲の教であるから、いつの佛の場合でも同じことである。

そこで舍利弗よ、その佛の時は惡世ではないが、今は惡世である。今お釋迦様が出現された時は世の中がドウモ善くない。だから多くの人は世の中が大分悪いから佛が方便を以て説くのだと思ふかも知らんが、決してさうではない。如何なる佛でも教を説く時には、世の中がどんなであつても、必ず低い方の方便の教からだん／＼と高い方の教を説き明すことになつて居るのだとある。

一體世の中でいふ善い悪いといふのは根本的の問題ではない。佛教の本當の精神から言へば、佛に成らなければ善ではないのです。善といふことは完全になるといふことであるから、佛以外に眞の善はない。どうも今の世の中は始終戦争ばかりして居る。惡世だと思ふけれども、佛様の眼から見れば總ての人が佛に成らない限りはみな惡世である。不完全な世の中である。普通の眼から見て惡世のやうに見えない時でも、佛はそれではまだ完全でないと思つて居る

から、三乘の教を説いて結局すべての人を皆を佛にしてやる。斯ういふ意味に取れば宜しい。佛はいつの場合でも希望を失はない、いつでも凡ての人が佛に成れるといふことを考へて居らつしやるから、いつでも嫌な氣持はなならない。併しいつでも安心はなさらない。世の中に生きて居る者の一人たりとも佛に成らない者がある間は、佛は安心されないのではありません。それ故に佛は如何なる場合に於ても安心されぬ。世の中が惡いとか善いとかいふのは、それは世間の人の考へであつて、佛の方からいへば、一切衆生が悉く佛に成らない間は安心しない。そこで假令世の中の中が相が險惡でない。比較的平穩な世の中であらうとも、佛はそれで満足しないで、三乘の教をだん／＼に説いて行つて、結局凡ての人を佛の境界に到達せしめるやうに努めるのである。さうしてその劫、即ちその佛の世の中に出現される時代を、大寶莊嚴の時代、大きな寶を以て飾つ

た時代と名ける。何故に大きな寶を以て飾つた時代と言ふかといへば、その國の中には菩薩を以て大きな寶と爲すので、國の寶といふのは菩薩より外にならぬ。菩薩がだん／＼世の中に現れて来て、その菩薩の骨折によつて世の中が淨らかなものになる。斯ういふ意味で大寶莊嚴といふのである。

これは何故佛を以て寶とすると言はなかつたのか、佛様が居らつしやるのだから、佛様を以て寶とすると言つたら宜さうなものなのに、菩薩を以て寶とするといふのは何故か。それは教としてはさうあるべきである。佛が尊いことはわかり切つて居るから凡夫から佛に近づいて行かうと努力する者が一番尊いぞと、斯ういふことでなければ大勢を導いて行くことは出来ない。だから吾々から言へば佛様ほど尊いものはないけれども、佛様の方から言へば菩薩ほど尊いものはない。何故なら菩薩といふものは凡夫の境界から佛の境界に到達すべき努力を積んで居る

ものだから、これほど尊いものは無い。菩薩を以て寶とするは佛様が仰しやるのは有難い事であります。お前達菩薩の行を積み、その菩薩の行を積み、佛は何よりも嬉しいと思ふぞ、斯ういふ意味で、佛を以て寶とすると言はないで、菩薩を以て寶とすると言はれた譯です。その菩薩がだん／＼多くなりさへすれば、菩薩の修行を積んで行けば佛に成るのでありますから、結局すべての人が佛に成りまして、そこが極樂淨土になる譯です。

彼の諸の菩薩無量無邊不可思議にして、算數譬喩も及ぶこと能はざる所ならん。佛の智力に非ずんば能く知る者無けん。若し行かんと欲する時は實華足を承く。

(後諸菩薩 無量無邊 不可思議 算數譬喩 所不能及 非佛智力 無能知者 若欲行時 實華足承)

その菩薩の數は無量無邊であつて、算盤で勘定し

ても勘定も出来ないし、譬喩を以ても譬へられない程である。それは佛の智慧でなければ能くこれを知ることには出来ない。「若し行かんと欲する時は實華足を承く」これは面白いことで、その菩薩が歩かうとする前に美しい華が咲いて居つて、その華の上を踏んで行くといふ。これは確かにさうです。本當に徳のある人が世の中を歩けば、歩いたところが皆美しくなる。だから徳の高い人が向ふから来る時に、こつちに待つて居つて、「どうぞ此處を歩いて下さい」と言つて、此處が美しくなるし、しに花を置くといふ意味であります。私はこれを單なる形容でないと思ふ。後の神力品に行くと「斯の人世間に行じて」ごあります。行は行ひといふ意味にもなりませんが、私は文字通りに歩いて行くといふ意味だけでも宜いと思ふ。本當に徳の勝れた人がスーッと通れば、通つただけで其處が善くなる。物を言はないでも、その人の顔つき身つきだけで善くなる。だから立派

な人の通る處は、あ、偉い人が通るナと思つたら、「あなたが通つて下されば此處が美しくなります」と言つて、豫め華を敷いて準備をするといふ、この心持はあつて宜い譯です。實際勝れた人が通つたといふことは大きい事です。私はかなり旅行を致しますが、全國を歩いて見ると本當にサウ思ひます。日蓮聖人の通られた道筋に於ては、法華が幾ら衰へたといつてもまだ／＼信せられて居る。親鸞上人の通つた處には、どんなに衰へても念佛が唱へられて居る。さういふ勝れた人が通れば、誰が邪魔しても邪魔は出来ない、實際偉いものです。それは疑ひのない事實です。實際勝れた人が通るだけで宜い、通つて呉れたといふことは實に尊い事であります。だから成るべく勝れた人が通れば宜い。勝れた人が通る時に華を撒いて淨めて「あなたが通つて下されば此處が美しくなります」と言つて感謝の意を表することは善い事であります。唯だ智慧や才覚だけでは

いけない。本當を言ひますと、その人の心の光が周囲を照すのが貴い。美しい人、立派な徳を具へて居る人が通る處は、その足の下にみな華が敷かれてあ

つて、その華の上を歩いて行くといふのは本當の事である。斯ういふやうにして國土が美しくなるのであります。

急告

小林先生の法華經大講座は、未曾有の功績を擧げてあと一回で彌々講了となる。併しこれだけでは妙法華經の心髓は得られない、法華經の肝心、其の神を體得せんとするには、どうしても日蓮聖人を通さねばならぬのである。そこで日蓮聖人を知る上に於て、聖人の御遺文五大名篇中、先づ開目鈔こそ私共の盲眼を開かれる最高標準であるから、之を本月十五日より左記の通り開講される、折角書龍點晴すべきである。宗旨の如何を問はず、信誘共に遠近を論ぜず來つて、小林先生の妙解を聴け！

左記

- 一、日時 毎週水曜日午後七時より八時半まで
- 一、場所 小石川區音羽町六丁目電停前統一會館
- 一、聽講料 一ヶ月前納金壹圓也 (無御遠慮事務所へ御申込下さい、便宜を圓ります)

昭和十一年七月一日

日蓮主義統一會館
電話牛込五三三六番

孟蘭盆のお話

道重 信教

風蕭々家々の佛壇が闇かれ、蓮華燈籠の美しい灯が流れ出し、紺碧色の茄子や、芋の足を付けてお馬に出来た瓜が、眞菰の上に飾られ、精靈團に線香の煙が、夢のやうに消えて行くさまは、何とも言葉に現はすことの出來ぬ、懐かしみに富んだ時の気分である。

實に我國の風俗中、お盆ほど情味豊かに宗教的形式を満足に表現した國祭はない。又これほど吾人の柔かい心を強ふする。優しい物語はない。

お盆は之を一口に言ふと、孝子の至情絶々として、幽明境を異にする親を慕ひ懐む、孝道以本の教である。普通にお盆といふは孟蘭盆を略しての謂で、正しくは烏藍婆摩と云ひ漢譯では救倒懸、逆さに吊され、責苦に泣き叫ぶものを救ふといふ意味であり、殊に盆の字にはスタヒとさいふ義があつて、人間苦のド底に墮さ苦しむ惨めな人々を、救護導する、防貧問題、社會事業等の方面から考へて

も、國祭である此の盆の行事は、頗る興味深い意義が含まれてゐると思ふ。

釋尊十大弟子の中に、目連尊者といふのがあつた。修養を積み神通第一の稱のあつた方であるが、非常な孝心に渾く、亡き両親の恩慕の情禁じ難く、自身に阿羅漢の悟りが開けて、神通自在の身となると、天眼通を以て、六道四生の有様を看た。すると、天眼通を以て、六道四生の有様を看た。すると、父上の方は幸に善處に生を受けて居られたが、母上は餓鬼道に生を受け、皮骨連立、巨んどの骨と皮ばかりになり、見るも傷ましい姿で飢渴に泣いて居られる。眼のあたりその有様を御覽になつた目連尊者の驚きは、喟ゆるにもなく、非常に歎き悲しまれて、そのお痛はしさを慰めやうと、白飯と清水をお椀にお盛りになり、

餓鬼界に下り、之を母上にお捧げになると、母上のお喜びは喟へんに物なく、直襟そのお椀を右手に持ち、食べやうとする。忽ちその食物は火に化して仕舞ふ。そこで目連尊者は、到底自分の力を以てしては、母上の苦患を救ふことは出来ぬとお考へになり、急いで祇園精舎に行き、釋尊にお頼りして、母上をお救ひする方法の御教を乞はれた。すると釋

尊は、「汝の孝心は方に天地鬼神をも動かすに足るが、慳貪邪見の罪業の報を、餓鬼道に受けた汝の母を救ふ事は出来ぬ。併し此に一法がある、よろしく僧自志の日を以て十方の衆僧を請じ、威神功徳の力を借りて、之を救ふがよい」と仰せられた。目連尊者は、釋尊の御教に従ひ、母上のために此の日を期して、供養法會を營まれたが、その同向の功力に依つて、即時に母上は餓鬼道の苦しみを脱し、善處に生を轉じた。之が即ち孟蘭盆會の産原である。釋尊が孟蘭盆供養の法を説かれたものである。僧自志の日といふのは、七月十五日のことだ、一夏九十日の安居があけて、多くの衆僧が一室に會し、互に夏中の非法を懺悔し合ふ日で、佛歡喜日とも云ひ、其後印度では此の日、七世の父母法界の衆生、無数の餓鬼を同向する此の法會が、盛んに行はるやうになり。有名な須達長者、波斯匿王、末利夫人等の深い信仰から、大施主となり盛大な孟蘭盆供養が年々に行はれるやうになつた

次で支那に於ては齊の武帝、唐の太宗等が此

の供養を営まれたやうである。

我國の孟蘭盆が始めて行はれたのは、推古天皇の十四年である。

「父母の生ける時に盡す孝行は、未だ充分なる眞の孝行といふべきでない、死したる父母及び祖先のために、厚く追善の供養法會を営み盡すを以て、眞の孝行とすること出来る。」

といふ意味の御詔勅まで降つてゐる。又齊明天皇の御宇には、特に齋壇を大和の飛鳥寺に築き、勅令に依る大法會の行はれたことが續日本記に記載されてゐる。越えて二年目の七月には、國祭として盆會を修せしむ、その勅諭が發せられ、上下一般に盆會が行はるるに到つた。聖武天皇の天平五年には宮中に於て盛大なる孟蘭盆會が執り行はせられ、爾來千三百餘年の歲月を経て、國風民俗を醇化して、今日に至つたのである。昆邪那律に

「若し父母無信なれば、信心を起さしめ、若し無戒なれば、禁戒に住せしめ、若し性慳なれば、惠施を行せしめ、若し智慧なきときは、智慧を起さしむ。子能く此の如くにして、方に報恩と曰ふを得べし」と。

盆の祭り、盆の供養は、孝行の教であり報恩の行である、孝道を重んじ報恩の誠を効して、父母に仕へ其心を安んずるさいふことは道徳の上から考へても、眞に價値高い行爲に相違ない。勿論、思は他に賣り付くべきもの又之を被るべきものではないが、之を受けたるもの、立場からば、假令一食一水の微恩でも必ずこれに感ずべきものであらう。況んや慈父の恩の高き山の如く、慈母の恩の深き大海の如きに於てをやである。

本師釋尊の御生涯は、實に此の孝順の御實行であり、孝道以本の礎の上に築き上げられたのが、佛教の實際的道徳觀であるといふも差支あるまい。「知恩報恩是孝道」とは心地親經報恩品に見ゆる釋尊の金言ぢや、恩を知り、恩に報ゆる道を、眞實に盡すことが出来れば、自ら佛意に契ひ、佛道を成するものぢやとの教である。

現代は思想界が混濁し、動もすると其の歸趨を誤らんとして居るが、これは全く社會の風潮が、恩に對する觀念を閉却し、此の觀念が缺如して居る事に起因する。孟蘭盆の起源は以上の如く、遠く源を且追

記事

本部 團報

維持會 本團役員任期満了に際して其の改選の爲めに、去る六月七日本部會館に於て午前十一時三十分から維持會を開催して、上田理事長の指圖のもとに、磯部常任理事から開會の挨拶があつて、直ちに改選の手續を経た結果、左記の通り選舉された。

- 理事
- 上田 辰卯氏 井上道太郎氏 岩上浦三郎氏
 - 磯部 滿事氏 中村 清一氏 山田 英二氏
 - 柴田 武治氏
- 監事
- 岩井 鸞氏 横山 正三氏

因に理事伊東竹三郎氏は中村清一氏と更迭され其他は重任である。右終了後午餐を共にし各自胸襟を開いた和やかな氣分の裡にも、教化運動に關する要案や、本團創立主唱者本多日生上人の年忌に關する件等が話題となり、又上田理事長の經濟觀等に就て有益な會話が交へられた。午後二時より日曜日例會が

教母の因縁に發し、拔苦與樂の實際思想となつて、我國民道徳の上に一大感化の影響を與へ來つたのである。非法の懺悔を意味する、眞自志の七月十五日をして、眞の國民一致の懺悔日として祖先の靈前に集ひ、眞實に報恩主義の生活を實行し、之を國祭日と御定め進ばされた齊明天皇様の、御聖旨に奉答し奉らんと期すべきである。



追まれるので隨時會した。

法華經講座 小林先生の連続妙講も、かの「法華經大講座」十二巻となつて全國的に、かゝる宗教書籍として稀有な何萬といふ賣行を示して、今や將に終結せんとして居る。否本誌を手にされる頃は、當會館に於ける講座は、更に日蓮聖人の御遺文講義となつて居るであらう。

小林講師謝恩會 昭和八年の春から足かけ四ヶ年の今日に到る迄、百四十數回正味二千時間の貴重な大精進を繼續され、幸に魔障もなく、「魔及び魔民ありと雖も皆佛法を護らん」との授記品の金文のやうに首尾よく講了されたばかりでなく書籍となつて出版され、永久に思想界をリードすることを思ふ時に、私共は衷心から小林先生の大きな佛事を感謝し、其報恩の微意を表さうではないかと、外池宇平、和賀謙介、宇野博順、山田英二、磯部滿事等の諸氏が發起されて、去る六月十日おなじみの深い本部の會館評議室に於て、午後七時から、謝恩會が催された。

これより養き、當日に限り午後六時より開講、七時終了と同時に記念撮影をして、一同は階上に移つた。そこには男子の側は主に僂子テーブル式に、婦人側は座蒲團にお膳といふ和洋混合した珍妙な配座にしつらへられてあつたが、席の定

まるや磯部滿事氏は、小林先生の長期間の御熱誠御懇篤なる御講義に對して潜越ながら一同に代つて厚く謝意を表し、又大家には、皆多忙の中からの妙法を聴聞すべく幾多の犠牲をお拂ひになつて懈怠の色もなく毎回熱心に参聴され、この淨業を清授された事を謝し、殊に石川隆一氏の遠記の有難さを稱へ、法動の多大なことを披瀝された。續いて小林先生は極めて御鄭重な感謝のお言葉をお述べ下さるのみならず、私共より僅かばかりの謝恩記念品を贈呈したことの御挨拶として、特に各自へ入念な御揮毫の色紙を御配慮戴いたことに、一同は「寶珠不求自得」の歡であつた。

やがて清宴は開かれ、會食中に和賀謙介氏提唱の乾杯や、今晚珍らしく來會された岩野直英閣下の感想談や、釋眞誓師の謝辭其他小林先生の「法華經大講座」の世間からの反響等に關する雜話もあつて歡興湧いて時の過ぐるを知らない程であつた。けれども幾多の惜しい名残を留めて九時、お互に感謝しつゝ散會した。來會者三十餘名、井上理事や、過去無缺席とも申すべき山田理事を始め、遠い大井の沼部氏や、本所の田中氏等全市からお出向き下さつた、全く有難い事共と思ふ。

日曜日清集 毎週の日曜日午後二時から四時半頃まで、勤行と法話の例會が營まれてゐる。そして月一回は法華經讀誦會つて來聽申入會申込も相當多かつた。かゝる大家を招き寄せる爲めには人知れぬ苦心と費用を要すること、蓮成寺吉永日洋師専ら中心となつて、堂園寺京藤義師や立正會幹部諸氏の甚大なる犠牲的行爲の賜と深く感謝するところである。由來この立正會は先年本多日生上人の法衣を戴いて團旗とした本團とは其縁淺からざるもので、東西相呼應しつゝ法陣を進めたいものと思ふ。

福島支部報

五月八日(金) 午後六時より中村様方に於て病後間もなく大阪に於ける法戰に参加せられた河合先生の御來福を仰ぎて支部例會を開催す。先生には初心者、高商會員等の爲に正しき、力強い信仰の把握を強調せられ言たまへ大阪における御奮闘の事にも及び、その賑々として盡さざる意氣と熱とは我々の肺肝を貫ぬいて餘りあるものがあつた。當夜は岩井支部長岩淵先生等御用事の爲止むをえざるとはいひながら御出席になられたのは、誠に残念であつた。

五月九日(土) 午後一時より高商生徒集會所に於て日蓮聖人讚仰會第二回例會を開催す。會長吉松教授支部會員の方々

として専ら修行にのみ精進して、あとで茶話會とされる。これもお互の信念増進には極めて必要な行事である。矢張り信と解と圓通して、偏狹に陥つた片輪の信仰にならぬやう心懸けたいものである。

地方教報 横濱支部の方は例月通り、小西日喜師、磯部滿事氏主として之に當り、特に六月三日、北山留吉氏の次女元子童女が、腦膜炎で急逝され、身重の悲母の悲傷は筆舌のよく盡す處ではない、それでも信者として其態度はまことに立派である。「此經難持」であり「此經を持たん人は難に値ふべし」と心得て持つ也、則爲疾得無上無道は疑ひなし」この大難とは他から來るものばかりではない、親しい内からも差し迫つて來る「魔鏡はすば正法と知るべからず」三障四魔の紛然として起つて來る處に彌々歎を増して來ることが、お互言外の安樂境である、信する者のみの體驗であらう。かゝる苦しい立場を経て漸く信心の妙味が心に深く刻み込まれて行く。

六月十四日の晚七時半から大阪立正會の主催で、同市大手國民會館に於て、小林一郎講師を屈請し「大乘心の發揚」と題して長講二時間、磯部理事も隨行されたが、講堂一階は超滿員で兩側背後に佇立された人々も多かつた。二階にも八分通り、全聴衆は一千四百と注された、近來稀有とする處、從も御出席下さる、先生には前夜と同様信仰の重要性を就中法華經による日蓮主義の信仰につき述べられ、大い「法華經要文」の御講義に移られた。

會員出席數十數名皆先生の力強い御講義に感動し、午後四時會を閉じた。尙今年度からは先生に御願ひして「法華經要文」の御講義を今後永續的にやつて頂くことにした。

五月二十三日(土) 午後六時より中村様方に於て中村家先代丑之助氏第十三回忌法要を兼ねて支部並びに高商例會を開く小西上人御唱導の下に嚴そかに中村家先代丑之助氏の靈を弔ひ續いて磯部先生より「信仰の對象としての宗教は、教祖の人格中心の統一圓滿なる宗教を造ばねばならぬ」事を懇々と説かれ、又小西上人は「松平定信の信仰法華經の優越性思想問題」等熱火の辯に聽衆一同を魅了し盡した。終つて茶菓を頂戴し乍ら故聖靈の追憶談に耳を傾け、信仰の人、又人格者としての故聖靈の逸話に一同深く感激し深更散會した、誠に故人を偲ぶに最も有意義な集ひであつた。

寄附金維持及團費誌料領收

(自五月二十一日
至六月二十一日)

| | | |
|----------|------|--------|
| 一金貳圓五拾錢也 | 福島 | 三澤おきよ殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 宮城縣 | 八木 左一殿 |
| 一金壹圓貳拾錢也 | 兵庫縣 | 九坪 武殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 千葉縣 | 宮原 やぶ殿 |
| 一金貳圓五拾錢也 | 東京 | 天野 辰子殿 |
| 一金貳圓五拾錢也 | 名古屋 | 牛田 共保殿 |
| 一金壹圓也 | 福岡 | 齊藤 正山殿 |
| 一金壹圓也 | 東京 | 小峰 豊子殿 |
| 一金五圓也 | 同 | 大谷權次郎殿 |
| 一金壹圓貳拾錢也 | 横濱 | 日下部二葉殿 |
| 一金貳圓四拾錢也 | 東京 | 木村 伴助殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 同 | 笠原はな子殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 同 | 吉越重次郎殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 和歌山縣 | 乾 涼育殿 |

| | | | | | |
|----------|-----|--------|----------|-----|--------|
| 一金壹圓貳拾錢也 | 鳥根縣 | 長岡 義實殿 | 一金貳圓五拾錢也 | 福島 | 豐岡 兼也殿 |
| 一金壹圓貳拾錢也 | 福岡縣 | 秋山 照代殿 | 一金壹圓貳拾錢也 | 名古屋 | 石田よしの殿 |
| 一金五圓也 | 岡山 | 須山茂三郎殿 | 一金壹圓也 | 奈良縣 | 笠目 善春殿 |
| 一金壹圓貳拾錢也 | 東京 | 深澤 紀文殿 | 一金貳圓五拾錢也 | 東京 | 鈴木 二光殿 |
| 一金貳圓也 | 同 | 沼部彌太郎殿 | 一金貳圓五拾錢也 | 横濱 | 青柳 榮一殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 同 | 池澤 泰明殿 | 一金四圓四拾錢也 | 京城 | 淺川みね殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 同 | 和田 雪雄殿 | | | |
| 一金貳拾圓也 | 同 | 柴田 武治殿 | | | |
| 一金壹圓六拾錢也 | 千葉縣 | 木村 日香殿 | | | |

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

感謝

本團賛助員高田直三郎氏は、先年來御異例専ら御加養中の處、遂に藥石の効なく、御家族の懇篤な御看護の許に昭和十一年五月三十一日長逝された。六月二日其御遺志に依り特に本團へ金貳拾圓也御寄附をたまはつたことは一入感激に堪えざる處、謹で感謝と共に其御冥福をお祈り申上げる。
法號 信解院直道日修居士
南無妙法蓮華經

本多日生上人著書特價提供

| | | | |
|-----------|-----|------|--------|
| 聖語錄 | 改版 | 送特料共 | 金壹圓八拾錢 |
| 法華經要義 | 賜天覽 | 全 | 金貳圓五拾錢 |
| 日蓮主義心髓 | | 全 | 金壹圓五拾錢 |
| 日蓮主義精要 | | 全 | 金貳圓九拾錢 |
| 佛教の本質と其價值 | | 全 | 金貳拾五錢 |
| 法華經要品 | | 全 | 金五拾錢 |
| 日生上人レコード | | 全 | 金參圓廿五錢 |
| 日蓮聖人 | | 全 | 金貳拾錢 |
| 本尊意識に就て | | 全 | 金拾錢 |
| 磯部滿事選輯 | | 全 | 金壹圓七拾錢 |
| 本多日生上人 | | 全 | 金拾錢 |
| 勸行作法 | | 全 | 金壹圓 |
| 河合彰明著 | | 全 | 金壹圓 |
| 皇道と日蓮主義 | | 全 | 金壹圓 |

東京市小石川區音羽町六一ノ七

財團法人統一出版部

振替東京九四二〇番

月刊「教」誌

東京市小石川區音羽町六一ノ七

發行所

定價一冊 金五拾圓
送一年前金 金壹圓貳拾錢
送料共

不許複製

編輯兼 磯部滿事
印刷人 大辻松太郎
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都印刷所
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團

東京市小石川區音羽町六一ノ七
電話牛込五三三六番
且東京九四二〇番

統一定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲致候
▲御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十一年六月廿七日 印刷納本
昭和十一年七月一日 發行
(第四百九十六號)

目 次

| | | |
|---------------|-------|-------|
| 法華經の經旨 | …………… | 故本多日生 |
| 法華經講話(三十二講) | …………… | 小林一郎 |
| 合掌瞻仰の態度 | …………… | 笹木欣爾 |
| 國民教育革正論 | …………… | 平山三藏 |
| 記 事 | | |
| ○本部團報地方教報 | | |
| ○寄附金維持及團費誌料領收 | | |

第四十一年八月號

統

一

法華
人團
統

團
發
行